
武器シリーズ

久楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武器シリーズ

【Nコード】

N2161BA

【作者名】

久楽

【あらすじ】

いくつもの世界が存在する内の『黄昏庭』、武器のお医者さんレノン＝コールと、彼の元に全世界から運び込まれる異常をきたした武器のお話。

武器力タルカタル

魔術軸第三分岐第六世界『黄昏庭』たそがれにわ。

その世界は、たった一つの大陸にたった一つの国。

国民達は争いを好まず、極めて平和に平和に暮らしていました。言ってしまうえば、？心？がなかったのです。

こう改善してみよう、とか今の方法ではここがいけないと思う心が。

だから自然科学は勿論、魔術軸にありながらも魔術もほとんど発展していません。

この国は『タソガレ』と呼ばれます。

『黄昏王国』でも、『黄昏国』でもなく『タソガレ』。

タソガレには四季が無く、雪は降らず、焼けるような灼熱の太陽もありません。

農業を続けていれば飢えることもないこの世界では、人間同士の戦は過去の話となり、戦と言えばいつのころからか現れた魔物との戦を表すようになっていました。

同時にこの国は、魔術軸のみならず他の軸にある異世界とも交流し、変わり者が異世界の文化：書籍や日用品を取り入れたりもしていました。

この国では、異世界の存在は一般人にも知られていたのです。

魔術の発展していないと先に申し上げたこの世界で、数人の魔法使いが暮らしています。

異世界から見れば魔術などとはいえない、不格好で不完全な《それ》。

しかしそれは、異世界の誰も持つてはいない奇妙で特殊で目を引くものでもありました。

彼らの《それ》は学問として成立した魔術ではなく、彼らが普通に生活する内に自然と発生したものでしたから、それも当然かもしれません。

Ladies and Gentlemen!

そろそろ始めることにしましょうか！

これから紡ぐは武器と青年と鍛冶師と世界の物語。

武器、カタレカタレ

想いを、悩みを、嘆きを

そして何より大切な所有者を。

彼ら彼女らと共に歩んでいくために。

同じ《世界》にいる為に！

今日お話しする物語の主人公は

《銀の意志》と《蒼き宝》。

二人はここに問いかけをひとつ。

いつまで、あなたと共に歩いていける？

銀色の彼はいつも、いつも思っていました。

いついつまでも、今まで共に歩んできた彼と共にいられば良いと。

それでも彼は知っていました。

いつか別れが来る事を。

だからせめてその時までとは

独りきりの世界で考え込みました。

第三の月、十と三日。

王国ほぼ中央に位置した首都ヴィスベルから南東の方向。

街の中全てを駆け巡る水路が大きなシンボルとなった水の街『キーモス』。

そこで気まぐれに学校の先生をしたり、野菜を作ったりして暮らす魔術師がいた。もどきだが。

多くの異世界の本が詰まった本棚に囲まれて、机に向かう青年の名はレノン＝コール。

キーモスの民には青系統の髪色の者が多いが彼もその例に漏れず、ふわふわとしたどうとも説明のしようのないぼんやりとした空色の髪と、意志の弱そうな濃い海の瞳を持っていた。

その瞳を覆うシルバーの眼鏡は角縁。

ほっそりとした肉のつかないからだに、だぶつとしたジャケット。どこからどう見ても徹夜続きの学者のようで、戦闘技術には疎そうである。

その彼は異世界から持ってきたのであろう万年筆で何かを紙に書き付けていた。

普通この世界で話される言語はこの国で生まれた公用語、フィール語だが書かれていく文字はこれもまた異世界からの輸入もの、漢字である。

「十と三日…レイピアのシュートナク、修理は順調明日依頼主に返却。えーと…ランスのベリルガント、依頼主は西のワイスのパン屋リంగాーロンさん…今日から修理開始、と…」

ぼそぼそとフィール語で言葉に出しながら書き付けていく。

これは彼の数ある癖の一つといえることだった。

一通り書き終わったことを脳内確認、コツコツとペンで机を叩く。快い音だと思う。

「書いておかないと覚えていられない頭だからね、僕の頭って…」
そうして、換気扇の回る薄暗い部屋で振り返った。

視界に映る埃っぽい部屋、本棚。
本棚にはありとあらゆる、異世界から輸入した本がぎっしりと詰まっている。

一切窓のあけられていない密閉された空間。

レノンの視線が噛み合うのは壁際、木箱の中へ入れられた鈍く光る金属だ。

強く意思持つ、彼の愛する金属。

今入っているのは二本。一本は自分の刀、むねひさ宗久。

そしてもう一本が昨日来たばかりの新入りだ。

カタカタ、カタカタ。

静かな部屋によく響くこの音。

彼がここに来た理由である、『独りでに震える』という現象がここでも起こり音を生み出していた。

レノンの目にはこんなところに主と引き離されて連れてこられてどこか戸惑っているようにも見える。

「これから暫く宜しく、ベリルガント。君がまた働けるようになったら、すぐにリンガーロンさんのところに返すからね」

その戸惑いを解すためか、レノンは穏やかな声を投げかけた。

パン屋を営むようになるまで王国軍として働いていた…つまりは魔物との戦いを専門として行っていたリンガーロンがここへ持ってきたベリルガントと銘のあるそれは、ミリタリーランス軍用槍だった。

まっすぐに飾り気のない刃を持った、百七十センチメートルもないレノンの身長より長い百八十センチメートル前後の全長を持つ、シルバーのごくシンプルなランスだ。

ただ戦うことのみを考えた設計、鑑賞用の美しい武器のように飾り立てていない、凜とした鋭い美しさがある。

その装いに不似合いに、刃の本に取り付けられた赤い布がある。
血の赤よりもっと鮮やかなその布はもう十数年昔にある戦に勝利

した際記念に付けたものだというが、少し古ぼけているだけで大きな破れやほつれは見当たらない。

物が壊れぬよう保護できる力をもった魔術師がいたはずだから、おそらくその者の力がかかっているのだろつと推察し、訊いてみるとやはりそうだった。

幾多の戦いを経ても同じ布が残るようにと術を施してくれたらしい。

ベリルガントと自ら名をつけたこのランスと、何百、何千もの戦いを共に生き抜いてきたと語るリンガーロンの口調は誇らしげで、レノンはそこに自分と宗久の間にある一種の信頼関係のようなものを感じ取った。

暫くベリルガントを見てそんな経緯を思った後、レノンは紙を巻いてばんばんと膝を払いながら立ち上がる。

もう昼に近いが、朝に来るよう呼んでおいた友が来ない。

友は親子五代続くという馴染みの鍛冶師で、新しい武器がやってきた時《外部的な傷み》がないかいつも診てもらっていた。

レノンが診ることができるのは、《内面の傷み》のみで、彼に鍛冶師の心得はない。

困ったもんだねえとぼやき、その友人の家であるこの街唯一の鍛冶屋へ向かった。

何度来てもむっとするような熱気には慣れない。

レノンはふと、異世界の夏というのはこんな感じよりもっと熱いのかと思う。

鉄を打つ音が聞こえ、彼の父に挨拶をして奥へ入る。

勝手知ったるなんとやらで、勝手にずかずか入っていくのが常だった。

「ジョシュア！！ジョーシュアー！！」

危ない危ないと注意されるので余り炉には近付かず声を張り上げて呼ぶと、ううん？と唸りのような奇妙な返事が返ってくる。

耳を叩きつけてくるような金属と金属がぶつかる音と、熱気が益々堪え難くなった。

赤々と燃える金属を鎚で叩く男の髪は燃えるような赤毛、レノンとは正反対に、焼け焦げたりほつれたりした服を着てはいるものとても活動的に見え、捲った袖から出た腕は筋肉隆々に鍛え上げられていた。

しかし彼は振り向かない。

自分が誰だか解っていないなと思ったレノンはまた半ば叫ぶようにして声を出す。

大声を出すのは好きではないのだが、仕方がない。

炉が燃える音と金属が叩かれる音で声が消されてしまう。

「ジョシユア！朝の呼び出し、忘れたかい！？」

その言葉にようやく合点いったように、びくと彼の肩がふるえた。

「レノン！？」

あたふた、と鎚が冷却用の水に浸されると暖められたものが急速に冷えて白い蒸気が一気に上がり、音を立てる。

打たれていた金属はそのまま置かれそれからはゆるやかに冷却体制に移った。

そうしておいて額に浮きだした汗を首にかけたタオルでぬぐつて、ようやく振り向き目を合わせた。燃えるような赤い目は、ジョシユアの一族の男性が皆引き継ぐ色なのだとレノンは知っていた。その目の色が特別魔力が強いことを表す世界があることもレノンは知っていたが、今のところ、彼に魔術の素質はないと判断していた。

「いやーマジ悪い。つい仕事で忘れてた」

「毎日忙しいところ悪いけど、僕もジョシユアしか近くに鍛冶屋がないんでね。頼むよ」

男、ジョシユア「エビルソンは長年の付き合いだけにすぐに頷い

た。

「よっしゃ、行こう。だけど一ヶ月前みたいに瀕死の剣を押し付けられても困るぞ」

「いや、今回はジョシユアも喜ぶんじゃないかな。綺麗なランスだから」

一ヶ月前緊急でやってきた剣はそりやあもうすごかったのだ。

刃が真つ二つ、装飾玉も割れていた。

何でも魔物と戦っているとそれまで傷一つなかったそれが突然折れたと。外面は勿論、内面も瀕死の重体だったがジョシユアの素晴らしい働きによって刃も玉も戻ったし、魂もレノンが修復に成功した為今は無事依頼主の許へ帰っている。

しかしその剣を丸一晚かかって修復した後、ジョシユアが言ったのは『もう勘弁して下さい…』のみでその後ぶっ倒れた。

それほど酷い損傷を受けた剣をまた押しつけられないかと心配しているのだろう。

その友は、綺麗なランスだと告げるレノンの声に顔を輝かせた。

「ああよかった！！また殺されるかと思った！」

「相当嫌だったらしいね…」

少し小高い所にある鍛冶屋を出、下っていく。

六番水路の傍がレノンの家、鍛冶屋に近い側から一番水路、二番水路…となっていて、今ようやく二番水路に差し掛かったところだった。

今日もいつものように空はぼんやりと青く、温かい風が吹いている。

「お前のせいでもある。あんだけ壊れてるものなるべく他の金属を使わずに直せだなんて無茶もほどにしとけて」

いかにもげんなり、といった調子で言った彼に、あははと笑いながら答える。

「うん、ごめん。でもジョシユアも武器の気持ちになって考えてよ。……自分の体に、得体の知れない何かが融合するんだよ？」

ジョシユアは言葉に一瞬虚を突かれた顔をして、ああそういうことかと得心いったようだった。

「でも、他世界にや『臓器移植』だとか『人工心臓』って技術があるらしいぞ？それについてはレノン先生はどうお考えですか？」

対してレノンは茶化すように言った彼の腰、服の裾をくいと引っ張る。

途端に彼は歩いてきたペースを崩した。

どうにもいつもペースを奪われがちなレノンは彼の調子を物理的にではあるが崩してやったことで、してやったりとにやりと笑む。

「この世界にはないけどね。……僕は嫌だよ、そんな自分と他との境がわからなくなるの」

途端に陰を帯びたレノンの顔に、普段彼が常に温和な笑みを浮かべるかぼーっとしているのを見慣れているのと、彼の事情を知っているのとで事の重大さに気が付き、げ、地雷踏んだかな？とジョシユアがあせったちょうどその時。

「レノンせんせい……」

前からピンクのリボンが目立つ女の子が走ってくる。

「ゾフィーヌ！もう帰っていたんですね。お帰りなさい」

彼女を認めるとレノンの顔は目に見えてぱっと明るくなり、駆け寄る彼女に腰を屈めて身長を合わせた。

「ジョシユアお兄ちゃんもこんにちは！」

「おう、お帰り」

くりくりした、モモやイチゴの飴玉のように綺麗な桃色の目で見上げてくる彼女、ゾフィーヌはレノンともう数名の教員で教えている学校の生徒で、今年八歳の二年生。

数字に強くすぐに四則計算を習得してしまい、意欲もあるので先生たちも彼女はきつと異世界へ頻繁に渡るような識者になるのではと思っていた。（この世界では珍しい人種だ。『意欲』があるというのは）

その彼女は先週から南の牧羊地帯にある祖母の家へ旅行に行つて

いた。

船を除き鉄道等、他の世界に存在する移動手段の殆どがないタソガレでは旅行はなかなかの大仕事になる。

「途中で怪我はしませんでしたか？」

「うん、大丈夫！羊さんがいーっぱいいいてね、もこもこしてた！」
牧羊は南の地域で主に行われていて、この近くでは殆ど見られない。

彼女はいい経験をしてきたようだ、と思ってレノンは笑った。

「それはよかったですね。羊って近くで見ると大きいでしょう？」

「うん！思ってたよりずっと大きかった！でね、これお土産！」

差し出された袋をジョシユアと共にのぞいてみると美味しそうなエクレアがあった。

「わあ、おいしそう。ありがとうございます」

につこり笑って礼をいえば、ゾフィーもうれしそうにした。

「じゃあね、先生！また明日ね！」

今日は休日だが明日は学校がある日だ。

「はい、また明日」

ばいばーい！と元気に手を振る彼女に眼鏡の奥、柔和な笑みを浮かべてレノンは手を振りながら立ち上がる。

第四水路の傍にある家へ帰っていく彼女を見えなくなるまで二人で見送った。

「うちで食べようか、エクレア」

「ん？おう。っーか…」

何？と見上げてくる背の低い友にジョシユアは呟く。

「お前、俺に対してだけ話し方違うよな？」

「気のせいだよ」

いいや絶対に気のせいじゃない、と思いながらジョシユアは先行く友の背を追った。

レノンの家は決して狭い訳ではない。

なのに激しい圧迫感を覚えるのは何故か。答えは一つ。
物が多すぎるのだ。

「なあ、また物増えたか？」

以前来たときには見なかった花瓶やら置物やらが視界に入るので
そうジョシユアが訊くと、あっさりと友は頷く。

「いまや、世界を越えてお客さんがやってくるようになった
よ」

「『前代未聞、武器のお医者さん』ってか？」

その言葉にレノンは苦笑を返す。

「僕にはそんなつもりはないんだけどね……ただ話を聞いてるだけ
だし。でも他の世界にも武器と話せるなんて変人はいないみたいだ
つと、じゃあこれ皿とフォーク」

差し出されたそれを受け取り、箱からエクレアを皿へ移したジョ
シユアはまた訊いた。

「で、ランスは？」

「あれだよ。名前はベリルガント。旧型のミリタリーランスを個人
用に基礎から作りなおしたものだと思うんだけど……当たってる？」

「ああ、その通りだろ」

二人とも銀のランスに視線をやりながらパクリとかぶりつく。

甘い。当然だが甘い。

生クリームとカスタード、二つのクリームが入っているようで、
さすがは酪農盛んな南の土産だけあって濃厚な味わいであり……言
葉では言い表せないねこれは、とレノンは思った。

このエクレアがもたらした時間は、ジョシユアにとってもレノン
にとっても至福のひと時だった。

このあまり似ていない二人の共通点は甘い菓子が好きだとい
うところにある。

イーセカンド

「四十数年昔のスタンダードランス、E・2ndが基礎だろうが……
随分いじくりまわしてるな。ウリの軽量が影も形もありやしない。
使ってる、いや使ってた人はどれくらい剛力だろう？」

レノンは一クレアをフォークで小さくしてから口へ運びながら、
依頼主…リンガーロンを思い出し、そうだねと笑った。

第一線を退いて尚、リンガーロンは如何にも戦いの似合う男といった体つきをしていた。

短いゴワゴワとした茶の髪に鋭い茶の瞳。

頬に傷があり一見とても恐ろしいが、話してみると気さくな人だった。

「…おそらくそうだと思うよ」

「え？何、バケモンみたいな人なのか？」

その問いに、うん、それに近いとレノンは返す。

へえ……と妙な動揺があったらしいジョシユアはしかし、すぐに再びベリルガントへ目をやった。

「よかったじゃねえかお前。E・2ndなんてそっけない名前じゃなくてカツコイイ名前つけてもらえてよ。ベリルガントの方がよっぽど男前だぜ」

「あれ？男かどうかなんてまだ僕にもわからないよ？」

「いいや、絶対男だ。この厳めしい作りからして野郎っぽさがマンマンだろ？」

ははつと笑ったジョシユアはすでに一クレアを食べ終わって、ちゃんとフォークを皿の上へ投げ出した。

立ち上がってベリルガントのもとへ向かう。

「綺麗なもんだな全く。よく手入れされてる」

木箱から持ち上げて、軽く両腕を使って振った。

やはりかなり重いなと顔をしかめる。

「俺が手を出すところはどこもない気がするぞ。逆に悪くするのが関の山だ。刃も傷んでないようだし…柄もまだ十年は持つと見た」

「どこも直すところがないのはいいことだね。でもわざわざ来てもらったのに、御免」

「や、別にいい。面白いものを見せてもらったし、一クレアも食えたしな」

そう言つて、ジョシユアは仕事も忙しいだろうに一向に立つ気配を見せない。

とうとう、沈黙に業を煮やしてレノンが問うた。

「……もしかして話を聞きたいの？明日でも聞かせてあげるのに」

「ここで待つてりやすぐ聞けるだろ？ベリルガントは久しぶりに興味の持てる武器なわけだしな」

早くやつてみるよと言われ、レノンは最後一口のエクレアを食べてフォークと皿を置いた。

再び木箱に戻されたベリルガントに歩み寄る。

「まあいいけど……じゃあ、君の話を聞こうかな。ベリルガント」銀の柄に触れる。瞼を閉じれば一瞬で闇が来る。

同時に魂が震えるような例の感覚が来た。

次に視界が晴れると、周囲は奇妙な世界だった。

広い広い世界、そのどこにも動物が見当たらないのに、その他は現実の世界と全く変わらないのだから奇妙という他ない。

声も聞こえない。

ある音は風の音だけ。

爪痕のある樹。

殺伐とした風景。

金属臭。

遠く眼前、風で巻き上がる砂煙。

何処までも続く、固い大地。

人がいないのは当然だ。ここはベリルガントの世界。

「成程……いくら持ち主が引退しても、ベリルガントの世界はやっぱり魔物との戦場なんだね」

呟き、歩く。

どうやらこの様子では、多くの《武器》達の世界同様彼を探さね

ばならないらしい。

何のことはない。

この世界で出会える『人』、それが間違いなくベリルガントだ。
「さて、どこにいるのかな」

探す事は簡単でも、歩いて辿り着くのに時間がかかるだろうなあとレノンと思った。

暫く行つた。多少疲れを覚える頃、森の中で開けた場所があつた。
木が切り倒され、広場のようになっているのだ。

そしてそこに、一人の人物が立っていた。

鋼の色、シルバーの直毛。

射抜くような明るいシルバーの瞳。

黒いハンチング帽を被り、飾り気のない灰のマントを着ていかにも戦士らしく、同時に狩人のようにも見える姿。

森の緑の中映える、少し年月を経て見える『長い赤のマフラーを首に巻いた』中年から初老の男。

彼は不思議そうな視線をこちらへよこしていた。

間違いようもない。

「ベリルガントですね」

「……ああ。驚いたな。本当に武器と話をする人間がいるとは」

リンガーロンによく似た、低く淒味のある声だった。

「どんな仕組みでこんなことができる？」

「僕が聞きたいですよ。生まれつき出来たんです。武器に触れるだけで」

ベリルガントの意外な質問に、レノンは苦笑しながら答えた。
そうとしか言いようがないのだから仕方ない。

本題に入った。

「リンガーロンさんはあなたを僕の所に連れてきた時に『全体が力タカタと独りでに鳴るし、どうも握ってみても変なんだ』と言ったんです。握った時の感触がおかしいって。何か心当たりは？」

そう訊かれベリルガントは、可笑しそうに笑った。

「なんだ、悩みが『体』に反映されることがあるのか？」

「ええ、ありますよ。僕がそういった話を聞いて、やることはたった一つなんです。ただあなたのような武器の『魂』に話を聞くことそれだけで、武器の『体』は大きく変わりますから」

「成程。俺達は同胞とも所持者とも、誰とも話ができません。お前を除いてはらしいが。人間風に言えばストレスというやつか？」

「かもしれませんねえ。ともかく、ただこうして僕と話すだけで大概は異常が治ってしまうんです。だから何か悩みがあるなら話してみませんか」

ベリルガントは暫く沈黙していたが、それもいいかもしれないと思ったか、座れと心地いい短い草の生えた大地へ座ることを促す。

荒野の中でこの辺りだけにこの芝生のような草が生えていた。

レノンはそのれに従って彼と隣合って座る。

「リンガーロンは、パン屋をやってるだろう」

レノンは口を挟まず、続きを待った。

この場所には人はいない。

動物もいないが植物や風や空、太陽は全く本当の世界そのもので、温かい風が吹いている。

ただ、あえて言うならば、レノンはこの世界に理由の分からない悲しさを抱いていた。

そしてそれがベリルガントの『心』が反映された結果だとも知っていた。

「もう歳なんだし、戦いに出ないのは解る。その方が安全でいいとも思う。だが……俺は本当の意味で納得できなかった」

この世界の青い空を眺めてベリルガントは笑う。

「正直馬鹿らしいと思う。あいつが楽しそうにパンを焼いて、買いに来た客に誇らしげにそれを手渡すのを見るのも楽しい。だが、俺はまだリンガーロンに……俺を使って欲しいんだ。使わなくてもただ触れるだけでもいい。そう遠くないうちに俺とリンガーロンは

引き離される」

武器達になく、人間にあるもの。

それは寿命だ。

武器は『体』的に見れば死ぬことはない。

何度だつて造り替えられる。

『魂』を見れば別だが、それでもその寿命は大概とてつもなく長い。しかし人間は、死んでしまう。

「そうやって俺が焦ってるうちも、俺はずーっと壁に立てかけられたままで……リンガーロンは俺のことを気にかけてないようだった。ここ数日を除いてな」

「寂しかったんですね」

レノンはこちらで口を挟んだ。

「怖かったんですね。一人だけで、この世界に取り残されるのが。もつと正確に言えばリンガーロンさんじゃない誰かに、自分が使われることが」

随分手酷く急所を突くな、とまた笑んだベリルガント。

すいませんねと謝るレノン。

ベリルガントは発言の割には気にした風のない表情、続ける。

「そうだな……俺には、他の誰でもいけないんだ。俺に名をくれ、この布を巻いてくれたリンガーロンしか駄目らしいんだ。共に戦場を駆けたあいつでない」と

そう言つて、笑いながらベリルガントは昔を思い出した。

幾度となく、幾度となく彼と共に……どんな魔物とも戦った。

幾度となくこの体は壊れたけれど、それでも幸いだったのだ。彼と戦い続けた日々は。

その始まりの、『昔』を思い出す。

「ほら、出来たよ」

馴染みの鍛冶屋である男から、改造されすでにE - 2ndではなく全く別の存在となった、まだ名のなかったベルリガントが使い手となる男、リンガーロンへ渡される。

「……うお。こいつぁもうE - 2ndじゃねえな！」

「あんたが滅茶苦茶な注文すんのが悪い。御代もたつぷり頂いとくよ。名前をつけてやつちゃどうだい？もう全く別の槍だからね」

そう言われて、いつも即決のリンガーロンが少しだけ迷って、でもやはり即、決めた。

「じゃあ、ベルリガントにしよう。柄にでも彫つといてくれ」

もう一度リンガーロンの手から鍛冶師の手に槍、ベルリガントは戻る。

その手の中から彼が見上げた主は、とても嬉しそうだった。

何故だか知らないが、その時ベルリガントも共に嬉しくなった。

「意味とか、あるのかい？」

「ないさ。音感。ベルリガントって名が俺には呼びやすいんだ。かつこいいだろ？」

そう言ってリンガーロンが笑った。

はっはっは、と豪快に。

「きつと何度も呼ぶ名だ、意味なんか拘って呼びにくい名をつけるよりは、呼びやすい名の方がいいだろう。よろしくなベルリガント」

そう言ってリンガーロンのでかい手が、柄をなでた。

それが、ベルリガントの知っているリンガーロンの最初の姿。

それからベルリガントはずっとずっとリンガーロンの傍にいた。

共に戦場を駆けた。

苦楽を共にした。

血のついた刃を拭ってくれたのは彼だ。

傷む度に手入れを惜しまなかったのは彼だ。

いつの間にか、三十数歳だった彼は老いた。
五十歳で退役した。
それでも傍にと思った。

彼はいつからか、自分よりもパンや客にかかりきりになった。
それが耐え難かった。

彼の妻よりも、娘よりも、ずっと彼を知っているという自信があった。

それでも、言葉一つ、伝えることはできなくて。

感謝の言葉も何もかもを伝えることはできなくて。

ただリンガーロンは一方的に与え続けてくれるだけで。

「人間だったなら、俺はリンガーロンに言葉を伝えられた」

「……そうですね」

唐突な言葉に、問い返してくるかと思ったが彼は問い返さなかった。

ただ、受け入れて返答した。

「俺が人間だったなら、俺はリンガーロンと対等であれたらうな。ただ全てを与えられるだけの存在ではなく。俺はリンガーロンに戦場という居場所を与えられた。魔物を奴と共に倒し、人々に感謝されて存在価値を与えられた。大切に手入れされ慈しみを与えられた。だが俺は自分自身の言葉で感謝を伝えることも、奴に戦場以外の世界を与えることもできなかった。俺に出来たのは、魔物を倒す手伝いのみだった」

「ええ、そうでしょうね。でも」

ひよい、と水色の頭が立ちあがった。

眼鏡の奥の瞳は相変わらずぼーっとして掴みどころがない。

「あなたの考えは正しい。間違っていない。だから言います」

振り返りと、笑みが降った。

「あなたが人間であつたと仮定します。もしもあなたが人間であつたなら、確かにあなたはリンガーロンさんに言葉を伝えられたでしょう。しかし……あなたがリンガーロンさんと出会える確証がどこにありますか。絶対に出会えていた、そんな風に断言できる人は存在しない。だから僕は言います。あなたは、ミリタリーランスとして生まれてよかった」

今まで出会ってきた武器達のことを思い、レノンは笑う。

「自分の身を悔やまないで下さい。だってあなたは、大好きなリンガーロンさんに……槍として生まれたから出会えたんですよ？」

レノンは手を差し出した。ひどく細い、白い指。

けれどもその手は、確かに何かを掴む為にある。

「もうどうしようもない過去はいいです。今と明日を考えましょう。遠すぎて不安になる未来じゃなく、この手が届く未来を。僕にはあなたの言葉を伝えることができるんです。リンガーロンさんに。僕、僕の魔術は、あなた達武器と使用者の明日を創る力だと思ってるんです」

だから、と目の前に手を差し出した。

今なら確証を持って言える。

彼が震えていたのは、泣いていたのだ。

彼の『魂』も、『体』も。

もうこのまま忘れ去られるのではないかと。

戦いから退いた彼にとっては、自分は過去の遺物なのではないかと。

そう恐れて、忘れられなくて泣いていたのだ。

「僕に、あなたとリンガーロンさんが望む明日を創るお手伝いをさせてください。僕に言葉を、托してください。もし一時、あなたがリンガーロンさんに言葉を伝えられる機会を得たらあなたは何を伝えるんです？」

言った。

自分が生まれてきた意味を、今のレノンは知っている。
リンガーロンはあなたを忘れたりしない伝える為に、言った。

「あなたの言葉を伝えてください。戦場を駆ける銀の意志よ」

ジョシユアはただ眺めていた。それしかすることは無い。

レノンはベリルガントの柄に触れ、そのまま目を閉じている。
ただ目を閉じているように見える。

でも、そうすることによりベリルガントと会話しているのだ。
昔は手を触れてみた。揺すってみた。

しかし何も起こりはしない。

ただただ眠るように目を閉じ、静かに呼吸を繰り返しているだけ。
彼の魂は奥深くまで潜り、ベリルガントと『会話』している。

「ほんと、変な奴だよなあ」

呟きは部屋に染み込んで消えてゆく。

その時うつすらと、ゆっくりとレノンの目が開く。

「レノン！」

「ああ、ただいまジョシユア」

ふるふる、と頭をはつきりさせる為か水色の頭が震われた。

「ありがとう、ベリルガント」

柄を撫でながら、銀のランスに礼を。

どうだったよ、とジョシユアに問われてレノンは苦笑。

「うん。ベリルガントはとても、とてもいい人だったよ。リンガー
ロンさんとよく似た人だった。今も、まだ戦っている人だった」

ジョシユアがその言葉の意味を計りかねているうちに、レノンは
言った。

「さて、リンガーロンさんと呼ばなきゃね。もうベリルガントが泣

くことはないから」

来た時には木箱の中、あれほどカタカタうるさく鳴っていたその体は全く動かなくなっていた。

一晩様子を見ての翌日。リンガーロンが来た。

「おはようございます」

「ベリルガントは直ったかい？先生」

リンガーロンは開口一番そう言った。

だからレノンは前に両腕を出して振った。

「いやいやだから先生はやめてください。今の僕は学校の先生じゃないんです。もちろん医者でもね」

レノンと呼んでください。そう前置きして、続ける。

「ベリルガントと話をしました。彼はですね、寂しかったんです」
「は？とリンガーロンの表情が訝しげになる。

レノンは、手を前で合わせる。

さながら祈りのポーズのように指をからめ合わせて。

「こここのところパンにかかりきりだったんですって？」

そう聞けば、リンガーロンは恥ずかしげに苦笑した。

「こんな大男がパン作りなんてと思うだろう？」

「いいえ、リンガーロンさんなら美味しいパンを焼くんでしょね。手が、優しい人ですから。……えつとそうじゃなく。つまりはそれでベリルガントは寂しかったんです。魔物討伐の軍を退役して、もう戦場へ出ることもなくなった。自分をあなたが見てくれる機会はもう訪れないんじゃないかって。もうこのまま、あなたに忘れ去られてしまっんじゃないかって。そう思って、泣いていたんです」

話が進むたび、リンガーロンが目を見開くのが分かった。

「ああやって鳴ってたのが、泣いてたってことか？」

「ええ、そうですね」

リンガーロンは苦笑ではなく、豪快に笑った。

その突然さにはレノンもびっくりする。

ひとしきり笑って、リンガーロンは言った。

「案外馬鹿だなあこいつも。俺に似たのかもしれないが」

今ベリルガントは刃を布に巻かれた状態でリンガーロンの手の中にある。

「俺だってまだ戦場にいてえさ。でもよ、考えてもみる」

リンガーロンは、遙か果てにある戦場を見ているようだった。

「俺がもし、誰も傍にいない状態で魔物に殺されてみる。ベリルガントはどうなる？俺の体と一緒に錆びて、錆びて……んで壊れんのか？それがあんまりに面白いそうだよ……だからどうせならもう軍をやめて、ゆっくりさせてやろうと思ったんだ」

何か間違ってたんだな俺、と言うリンガーロンに、いいえ、とレノンは返す。

「パンにかかりきりになってた所はあるな。面白くてよ。それでも俺は一度もベリルガントを忘れたことはなかった。最高の相棒だからな」

忘れられるはずもない、というリンガーロンにレノンは笑いかけ

る。

「なあ、ベリルガントはどんな奴だった？俺に似てたか？」

レノンは、彼を思い浮かべて、言った。

「ええ。とてもあなたに似ていました。あなたのように豪快に笑う人で、あなたのように大きな心を持つ人で、あなたのように戦場が似合う人で」

ふふ、と。

「あなたのように、よく物事を考えられる人でした。直毛の銀髪と銀の瞳で、あなたとよく似た低い声で、あなたにとっての幸せを純粹に考えている人でした」

そうか、とリンガーロンも嬉しそうに笑った。

だからレノンは続ける。

「僕からのお願いです。パンのことは大好きでいてください。……でも、時々ベリルガントに触れてください。忘れていないと教える為に。それから……」

リンガーロンはただレノンの方を見ることで先を促す。

レノンはリンガーロンの向こう、窓、更に向こうのうすぼんやりとした空を見て言った。

「ベリルガントより、伝言を仰せつかりました」

昨日行った世界を思いだした。

うすぼんやりとした空に、固い大地。

青々と茂る樹。

ベリルガント、彼にとつての世界は主と共に駆けた戦場だった。

その世界はこれから変わるのだろうかと思つた。

これからあの世界が、パン屋さんの平和な空気へと変わるのかとリンガーロンが、ベリルガントの世界をパン屋へと変えることのできる人ならいいと思つた。

……同じ世界を見られること、それはきっと幸いなことです。から戦場を駆けた銀の意志を、貫きの意志であつた彼の言葉を思い出す。

「『あなたが幸せである世界に、俺がいられること。それがただ一つの望む事だ』と」

「なあ、ベリルガント。戦うってきつついなあ」

(……………)

「でも俺は、お前でよかったよ。俺にはお前がぴつたりだ」

（ああ、これからもお前の力となる。必ず。）

「退役したら、料理でもしよう。それで家族と幸せに暮らそう」

「子供たちに、お前と俺の武勇伝を語ってやろう。俺とお前がどれだけ最高のコンビだったか教えてやろう。だからその武勇、これから作りに行こう」

（……お前にとって、それが幸せならば）

戦士と銀の意志、共に駆け抜けた戦場。

駆け抜けて、駆け抜けて、駆け抜けた。

だからゆつくりと歩むことに歩幅が合わなかっただけ。

お互いがお互いを向いているのなら、きっと

またゆつくりと歩む世界で、歩いて、歩いて、歩こう。

きっと、同じ世界で歩いてゆける。

「なあ、ベリルガント。家へ帰るか……俺達は、ずっと走り通したつたろう。だからそろそろゆつくりすることにしようや」

戦士が、言った。

「お前にはゆつくりは難しいんだろなあ。だから仕方ねえ、俺が合わせてやるさ」

もう泣くのをやめたはずの槍が、震えた気がした。

（一緒に）

（歩いていく、か。）

青い彼はずっとずっと考えていました。

赤い主人の苦悩を。世界で一人きり、孤独である彼のことを。

青い彼にとっては『世界』に一人でも、やっぱり赤い主人とその黒い相棒がずっと傍にいましたから、寂しくは無かったのですが……。

青い彼は、主人にとって楽しいことをずっとずっと考えていました。

楽しいことが大好きな、主人の為に。

楽しい世界を、主人と一緒に作る為に。

やっぱり変わらずぼんやりと暖かい日差しが差す、キーモス六番水路沿い、レノンの家、仕事部屋兼応接間兼生活スペース兼書斎兼ジヨシユアとお話部屋。

レノンはメロンパンを食べながら、手紙を読んでいた。

幸いなことに漢字（と仮名）で書かれている為、読める。

「『剣の名は青宝絶音^{せいほうぜつおん}、度々、輪郭がぶれるような奇妙な症状が起ります。聞くより一目見ても早いと思いますので本日そちらへ向かわせていただきます』……か。輪郭がぶれるねえ」

もぐもぐもぐもぐ。咀嚼。

「食ってから喋れ食ってから」

「ぐめん」

そういうジヨシユアはまたチヨココロネに食いついた。

本日の学校は昨日行われた地域と学校生徒との交流会…小規模な

祭りのような物の振り替え休日、鍛冶屋の仕事もジョシアの父が一人で行っているため、ジョシアは休みだ。

「もうベリルガントが帰ってから一週間か。なんか聞いているか？」

「うん。もう鳴ったりしなくなっただけさ」

このテーブルを埋め尽くす大量のパンは、リンガーロンからの報酬である。

何を支払ったらいいのかと聞かれ、レノンがパン食べたいですと言ったのでこうなった。

昨日郵便屋さんが持ってきたばかりのほやほやである。

「リンガーロンさんも考えたねえ。ベリルガントを宣伝に使うとは

……」

手紙を読んだところによると、彼は体が動く限りベリルガントを使って豪快な槍舞を見せて客を呼んでいるらしい。

子どもから大人まで大人気でなかなかの好評のようだ。

彼の体躯であれだけの勇壮であるベリルガントを振れば、それは見てたえあるものとなるだろう。

その様子を想像して、レノンはふふと笑った。

彼の言動に疑問を覚えたジョシアが、なんだよ？と聞くので、その事を順を追って説明してやれば、そりやなかなか頭使ったなあ！と感心したようにジョシアも頷き、笑った。

「また、見に行かないといけないね」

「ああ、また暇な時にな。お前一人でどこも行かせられねえよ危なつかしくて。……で、その手紙はなんだ？」

「ん？突然の話題転換だね。うん、今白い鳩が持って来たんだ」

そう聞いて、え？とジョシアは耳を疑った。

「嘘だろ？」

伝書鳩という技術は知っているが、この世界には存在しない。

そんな魔術を使う者も知らない。

だからジョシアは我が耳を疑ったのだ。

「ううん。本当」

まぐ、と更にメロンパンに食いつきながら、その手紙をジョシユアの目の前に広げた。

「？」

「差出人」

言われ、縦書きの手紙の一番左の行に目をやった。

「魔術軸第一分岐第一世界『クインテット』…フェンデラム総合魔術校校長…しずきり ゆうなぎ 静桐遊凪^{しずきり ゆうなぎ}…ええええオイ！」

魔術軸第一分岐第一世界。

第一分岐という言葉が表わすのは世界の分岐。

この数が同じなら、同一世界の過去未来という関係が成立する。

この『黄昏庭』と『クインテット』は分岐数が違うから全く別の世界だ。

第一世界とはその軸、つまり魔術軸にある世界のうちの世界の強さの順を意味する。

数が小さいほど、魔術軸であれば魔術の威力、精度が高く学問として完成されているということとなり……

「第一世界って、魔術軸の最高世界じゃねえか！」

「そうだねえ。しかも静桐遊凪って、クインテットの代表だよ。基準軸と特殊軸を合わせ全ての世界で比較しても、最強って呼ばれる。炎の魔術を操り、『世界を閉じる』力を持つてる真紅だ」

うわ、とジョシユアは小さく声を上げた。

「副団長のガルフィーと比べてどうよ？」

「比べ物にならないね。第六世界の人間が第一世界の最高に敵うわけないよ」

ガルフィーとはこの世界の炎を手から出す魔法使いだ。王国軍に所属し、魔物と戦っている。

えらいの来ちゃったなあ、と言葉の割にあまり困った風もなくレノンは頭を掻く。

「そんなどえらい先生も、武器がへそ曲げて困ってんのか？」
くす、とレノンは笑った。

「言つたじゃない。僕しかこんなことができる人間がいらないんだつて。どこから噂を聞いてきたんじゃないかな」

まあとりあえず待つてようか、とメロンパン最後の一かけを口に放り込んで、来客を待った。

その来客がやって来たのはわずか五分後のことだった。

自分とジョシユアが自己紹介し、慌ただしくお出ししたコーヒーを一口飲んでにっと笑う。

「こりゃ美味い。コーヒーにはこだわりがあるとお見受けしたぞ」

「ええ。コーヒーマニアですからね」

見れば見るほど、不思議な男だった。

歳は六十二と聞いたが、十歳は若く見える。

確かに顔に皺は刻まれているがよく変わる表情や瞳に宿った意思、それに無駄なく鍛え上げられた長身などが、全く老いを感じることを許さないのだ。

髪はレノンのものより鮮やかな空色に、光る紫。

一瞬惑ったがそうとしか形容できないのだ。

銀に紫を塗り重ねたような、メタリックと言えいいのか、そんな紫が空色の髪にところどころ混ざっている。

その肩を過ぎるなめらかな髪は赤いひもでポニーテールにされている。

瞳は紫陽花を思わせる青紫で、はっきりとは言い表せないが『力』を持った視線を投げかけてくる。

その目は小さな子供のように、絶えず爛々と輝いていて。

着ているのは真っ赤な、目にいたくない程度に彩度の抑えられた丈の長い服。

訊けば向こうの世界の魔道士の普段着である魔道ローブらしい。それに茶のショートブーツ。

身長は百八十センチメートルを超えているだろうに、不思議と背が高いような気がしない出で立ちだった。

「俺の学校で教えてる先生にもマニアがいてな。中々舌が肥えてるんだが……でもこいつは美味しいな」

声は脳に染みるように暖かい。

リンガーロンの地を響かせるような低さではなく、高低の間を行くような微妙な低さで響く声だ。

「ん、そうだこれは土産。うちの相棒に作らせたものだ」

どうぞどうぞ、と差し出された紙袋からそれを取り出してみるとそれは箱に入った美味しそうなチョコレートのシフォンケーキだった。

「おおお！」

眼前に現れた菓子に、ジョシユアが反応。

レノン彼の腰をさりげなく殴る。

がつつくなみつともない、との声と共にだ。

大体いつものことなので友も大して気にしない。

「美味しそう。早速切りますね」

うきうきとその箱を展開して、中のケーキにナイフを入れる。

ふわふわとしていかにも美味しそうなケーキ。

それを皿にのせて手渡し、自分とジョシユアの分も。

手を合わせていただきます。

口の中に広がる甘みは至福の瞬間だった。

「おーいしい……」

ジョシユアがうつとり、といった。

大の男がケーキでうつとりしているのはなんとも……とかいうと偏見になるのかなあ、でも似合わないなあとレノンは彼を見て思考。「だろ？だろ？俺もケーキ類大好きでな！。自分で作るの面倒くせえから相棒に教え込んで作らせてんだ。ここのことを教えてくれた旧友が、お前さん達がケーキ大好きだって言ってたから」

「美味しいですーありがとうございます本当」

じーん。

美味しいケーキに感動するレノンに、言葉は唐突に投げかけられた。

空間の変化と共に。

遊風が右腕を何もない空間へ伸ばすと同時、風がその腕を包むように巻き起こり、

「！」

大きく湾曲した鋼色の刃を持つ剣だった。

澄んだ深い輝きを放つ、宝石であろう青い玉が柄に埋め込まれ、取り巻くように銀で施された装飾は蔦だろうか、あちこちに木イチゴのような塊も見られる。

何か、周囲の空気を重くさせる剣だった。

「こいつが青宝絶音。目に見えぬ音さえも絶つ青き宝、って大層な名のついた剣だ。こいつを見て欲しくてな」

皿を置いてそれを受け取る、と。

「重っ！」

がくん、と体勢が崩れ慌ててもう片方の手もやって支える。

遊風があまりに軽々と持っていたので油断したが相当に重い。

「おお悪い。こいつは魔術のかかっている剣でな、他の世界のものはちよいと違うんだ。自分の魔力を馴染ませると、ものすごく軽くなるんだ。そうしなきゃ普通に重い」

成程なあ、と思いながら刃を見た。

透き通るような美しさを持った刃だ。

「？」

違和感を感じた。

実際に字面の通り、透き通っている。

「え？」

ぶおん、といった音が似合いそうだった。

脈打つように、振れるように、輪郭がブレているのだ。

ブレた部分が透明に透き通って、まるで幽霊のよう。

「それなんだ。困ってんのは」

苦々しげに遊風が言いながら、コーヒーを啜った。

「俺も自分の世界で全国の名高い魔道士に診させたんだが、原因が全く分らない。弱り果ててた時にレノン、お前のことを旧友に教えてもらってすぐにここへ来たんだ」

レノンは刃を見つめていた。

こんな現象は初めてだなあ、と思いながら。

「頼めるか？」

「ええ、もちろんです」

返答は笑みと共に、横で二つ目のケーキを食べる友人を半目で見た。

「青宝絶音について、なるべく多くのことを教えてくださいませんか？」
そう訊けば、やや考えるような表情を見せ遊風は口を開く。

「俺にはもう十八年、一緒に学校を支えてきた相棒がいてな。何年か前に魔道士達の集まりから俺が表彰を受けて別にいらねえ名誉を貰った時、その相棒が『あんたの為に作ったもんだ』って言うてくれたのがこの青宝絶音だ。その基礎には俺じゃなく相棒の魔力が使われてる」

に、と笑う。

「俺と相棒の相性がばつちりだから、その魔力で作られてるこいつとの相性もばつちりだと思うぞ。この謎のブレ現象が起こるまでは他の剣みたいに折れたり、変にへそ曲げることもなかったしな」

成程成程と忘れっぽい自分を知っているのでレノンはメモを取ることを忘れない。

「ありがとうございます。必ず元通りにしますね」

「頼む。この状態だと折れたりするんじゃないかと思って迂闊に使えなくてなあ」

じゃ、悪いけど一回帰るな。できたらこれ押してくれと渡されたのは透明な緑色のプレートだった。

真ん中にある赤いスイッチを押せということらしい。

そうしておいて、遊風は自分の世界へ帰って行った。

一方、残された二人。

「……こんな症状は初めてだねえ」

「なあ、レノン」

長い付き合いになる友人だ。大体考えていることは読める。

「押しちゃ駄目だよ」

「だ、だって……こんな押してくれって感じの突起具合なんだぞ？俺が押さずに誰が押す？」

「いやいやまだ青宝絶音に会ってすらないし。駄目だからね絶対」

凄く心配なので彼の手からスイッチを奪い取って自分の近くに置いた。こんな時レノンは友人が愛すべきおバカさんというキャッチフレーズが似合うのではないかと真剣に考えてしまう。

いや、流されるなと思い直した。

「じゃあ、早速行ってくるね。直すところもないだろうし」

つまりそれはジョシユアには仕事がないということだ。

「あ、じゃあ俺残りのケーキ食べて待ってていいか？」

「……全部食べないでね」

それだけ言い残し、レノンは青宝絶音の刃に触れて、目を閉じた。旅立った彼を見ながら、ジョシユアは呟く。

「最近、俺いい武器によく逢うよなあ」

うんうん、と頷く。

バランスのとれた美しい青の剣。

この世界にはないタイプの装飾に、恐らく魔力の影響なのだろう、氷のような闇のような冷たい力の印象。

これは恐らく……と思考と共に、その内容をジョシユアはそのまま口に乗せる。

「こいつ、多分『魂』は育ちのいい坊ちゃんじゃないか？俺やレノンぐらいの」

はつと気が付くと、ひんやりとした空間に立っていた。
固い足元を見下ろせば、

「タイル……じゃあここはまさか」
周囲を見渡してみる。

タイルの広い廊下、広々と抜ける空間に部屋の列。
1 - Aと書かれたプレートのかかった部屋。

向こうには1 - BやCやDが見え、中には机と椅子の広がる空間。
「間違いない、ここが遊風さんの学校……確かフェンデラムだ」
全体的に、オレンジを強く感じる。

おそらくオレンジが校色なのだろう。

探すべき青宝絶音は遊風の剣だ。つまり
「普通に考えれば、校長室にいるはずだよね」

さて、校長室はどこかなと幸いにもすぐそばにあった案内板を見て
進み始める。

「^{けんかく}剣核」

『クインテット』、フェンデラムの校長室で声が生まれていた。

「剣核」

「うつせえ黙れ。人が仕事してるんだ」

紙飛行機を折りながら投げかける遊風の言葉に応える相棒の声は
そっけないというより並々ならぬ怒りが込められたもの。

遊風は気にした風もなく続けた。

「武器と話をするって、すげえよな」

「あ？ああ、あの俺に手土産にするから焼けて突然シフォンケーキ
焼かせた件か」

この剣核という男、見かけは多少おっかないが、元から料理が好き
だったのと遊風のお菓子を作らされていたお陰でケーキ、カステ

ラ、大福、ところてん等ありとあらゆる菓子を作りこなすという非常に奇特定の五十代男性である。

ちなみにこの校では魔術剣を教えている。

シフォンケーキなどお手のもので、別にそれに対して怒っている訳ではない。

この、正規魔術教員が一桁しかない校で寝る間を惜しんで皆働いているのに、わざわざそのまとめ役である教長にケーキを作らせるといふ暴挙に対して怒っているのである。

遊風は相棒の剣幕に全く動じず言葉を継ぐ。

「あれ？それ聞いてつと、俺って酷い奴じゃねえか？気のせい？」

「ほほうようやく分かったか。足りない頭でよくたどり着けたもんだなおい」

その剣核の剣幕にふつと遊風は笑うと、紙飛行機の羽を広げた。すつと柔らかく飛ばす。

風に乗れないで、紙飛行機は大して飛ばずに墜ちた。

それを見届けて言う。

「望まずに植えつけられて人を超えた力を得た子らの世界があつて、崩れ落ちる物語に支配された、救世者を欲する悲しい世界があつて、裏表そつくりよく似た神国の存在する世界があつて、誰も彼もが殺し合わなければ成立しない世界があつて、一見平和で、でも確かにそれぞれが過去と闘っている…大工連中の世界があつて」

一息。

「こんな俺に振り回されて壊れかけて、でもいいやつばかりでみんなが一生懸命な世界があつて」

自分が見てきた全ての世界を

自分が見てきた全ての世界の住人を思つて遊風は笑った。

「それだけじゃなく、レノンには見えるんだ。武器達の世界が。武器達、そいつら自身しかない、そいつのためだけの世界が。青宝絶音の世界はやっぱりフェンデラムかな」

ともかくだ、と言う。

「俺は聞きてえよ。どれだけ悲しい世界があつたら、『神』は満足するんだ？どれだけ悲しい世界を、苦しい世界を作つて皆に苦勞させりやどこかにおわします世界を超越した性格悪い絶対神は満足するだろう」

「決まつてる」

剣核が初めてまともに返した。

「俺達が、世界中のみんなが狂うまで、世界中の全ての生命が狂つて壊れるまで、満足することなんてねえんだろう」

求めていた返答だったか否か、真紅は笑った。

「皆皆幸せになればいい。子供だつて願う簡単に純粹な願いだ」

昔と今と未来を想い、言った。

「なのはどうして、皆が幸せになるのはこんなに大変なんだろうな」

辿り着いた扉の前一つ息を整えて、重厚な扉を押して入った。

真つ青な長い髪。

長い魔道ローブは紺に近くなった青。

振り返る、憂いを帯びた気だるい目もまた青。

「青宝絶音ですね。初めまして。レノンといいます」

「話」

「え」

飛び出した言葉はあまりにも唐突だった。

「話を聞いて、あなたの答えを聞かせて。僕の異常はきっとそれで治るから。お願い」

レノンは目をぱちくりとしばたかせて、はいと答えた。

勧められたふわふわのソファに座つて、話を聞く体勢を作った。

「僕の主、遊風さんは天才です。世界の誰も敵わない」
無言で先を促す。

「普通魔術は、膨大な研究と実践によって培われるものです。でも遊風さんは言葉も話せないうちから自在に術を操れた」

「楽器は弾き方を習うわけでもなく、本能とでもいうようなもので、どんな楽器でもプロ級の演奏ができます」

「記憶力が人外のレベルで、今まで読んだ数えきれないほどの本や全国の詳細な地図は完全に暗記しています。今まで見てきた全ての『景色』も。計算能力も同様で、へたに他人が計算機で計算するよりずっと早く正確に答えを出せます」

「遊風さんは少しも苦労も努力もせず、ただのんびりと暮しているだけで世界最高の魔道士と認められ、世界の誰も辿り着かなかった最高の資格に辿り着きました。最高の炎の魔道士としての称号も得ました。最高の剣士としても認められています」

レノンさん、と青宝絶音は言った。

「僕の主、遊風さんはたった一人で生きていけます。他人が協力しようとも、それは足を引っ張ることにしかないんです。でも、でも遊風さんは人として生きることを望みました。だからいつも仕事をサボって、相棒の剣核さんがいないと生きていけないように見せているんです。『能力的には天才だが、生活能力、行動の面では人より劣る』ことを演じようとしているんです」

「そうすることで、自分の優れた能力を隠して人と共に生きようとするのをどう思いますか？あなたの考えを聞かせてください」

へへ、と彼は笑った。

「ずっと、誰かに訊いてみたかったです。僕と、遊風さんと、遊

凧さんの周りの皆が間違っているのかを」

答える為、否、応える為にレノンが口を開く。

「遊凧さんは一人で生きてはいけなかったんですね。能力的には可能でも、心が」

青宝絶音は黙っている。肯定と受け取ったレノンは続ける。

「遊凧さんが望んだのは、世界の頂点でも、校長先生になることでも、偉い魔道士になることでもなかったんですね。ただ……ただ普通の幸せを願っただけだった。恐らくは」

「ただ楽しいことを」

一言が重なった。

青宝絶音が続ける。

「一人では楽しくないのだと、言いました。世界を楽しくするために、世界を楽しくすることが出来る人を増やすために学校の先生になったんです」

うん、とレノンは言った。

「願いは、立場によって全く違うものですね。大半の人は遊凧さんのように素晴らしい才能を望むでしょう。でも、それを持っている遊凧さんにとってはそれは重荷でしかなく……遊凧さんが望んだのは、ただ普通であること」

レノンは思った。

随分昔のことを。

こんな奇妙な力など無ければいいと思った頃を。

そうして破顔。

「僕はいいと思います。それでいいと。責任を持つべき人も持つ必要も存在しないと」

「どうして、そう思いますか？」

「だって」

自分と重ね合わせてしまうのはいけないことだ、と思いながら言

葉を続ける。

「だって遊風さんも僕も、同じ人間ですから。遊風さんにも、僕みたいによへによへに平和に生きる権利はあるんだと思います。大好きな友達とくだらないこと話し合って、たまに喧嘩して、美味しいケーキを食べて」

「そうやって生きる権利が。だって天才である前に、異端である前に、人間なんですから」

青宝絶音は何か考え込んだ様子で、口を開いた。

「でも、剣核さんに迷惑をかけることを遊風さんは気にしているんです。それでも、誰かを犠牲にしてもいいと言えますか？」

「……だって、逃げようとしていませんから」
にこ、と。

「聞けば十八年の付き合いになるそうですね。それだけの時間があつたなら逃げたいと思えば逃げられたでしょう。剣核さん、でしたっけ。その方は、どうやって過ごされてきましたか？」

「……遊風さんと一緒に、仕事をしていました。どんなに無理難題を吹っ掛けられても、一通り怒鳴って殴ったら、黙々とそれをクリアしていく人です」

ほら、やっぱりそうだと笑う。

「ね。逃げていない。剣核さんにとっても、それが『幸い』であるんです。剣核さんはきつと自分がちよつと苦勞をしても、それが遊風さんを人間として生かすためなのだと思います」

これで、青宝絶音にとつても幸いなのかと思いつながら言った。

「双方が幸いであるならば、それは苦勞をかけるとかそんな言葉では表わさない筈ですよ。だから僕は遊風さんがそうして人として生きようとするのは、正解なのだと思います」

その答えで満足だったか、青宝絶音が笑んだのを見て、よかったと思つた。

そして、自分の言いたいことを言う。

……これも所詮、僕の自己満足ですけど。

でもこう口にすることで、武器と使用者の幸いであればいいと思うのだ。

「あなたの言葉を、遊風さんに伝えたいんです。何か僕に伝えてはくれませんか？主の幸いを願う青き宝よ」

青き宝は思い出す。二人の、やり取りを。

「俺はお前を苦しませるよ、剣核。大体……お前に会わなきゃ俺もこうまで強く人間でいたいなんて思わなかった」

「違う。だが、お前があの日俺の村に来なきゃ《戦神》せんしんは生まれず、世界は滅んでいたはずだぞ。お前が俺を魔術の世界に引き入れたんだ、せいぜい楽しませて責任は取ってもらおう」

「諦めが、ついたってか？」

「諦め？んなもん、村を出て《戦神》となった時にもうついてた。普通には死ねないな、ってな」

「そーかい。……じゃあなあ、せめて俺はお前を犠牲とする代わりに、世界を変えると約束しよう。誰もが楽しい世界を作ると。それが叶わなくても、少しでも幸いな世界へ近づくよう努力すると」

「その傍らに、それを置いてやってくれよ。音さえも絶つ、何者にも負けない剣を」

「誰も彼も救おうとした《戦神》と、自分のことしか考えなかった《真紅》との魔力が共存する刃、か。面白い。じゃあ俺はこの刃で、どれだけのことが成せる？」

心底楽しそうな笑みと共に剣核の口から返った言葉は、青宝絶音が想像した通りのことで。

「きつと、お前の手が、声が、魔力が届く範囲……救いが叶う範囲全ての人と物を“すくい”あげるのさ。その刃を、《戦神》を傍に置く《真紅》として使ってみるよ。もう二度と逃げない為に」

「逃げようとしたらどうする？」

「勿論ぶん殴って怒鳴って改心させる」

翌日、スイッチをジョシユアに押させて呼びたてた男は相変わらず赤いローブ姿だった。

現れた遊風に初めにレノンが頼んだのは、剣核という人物の写真を見せてもらうことだった。

「なんだ？青宝絶音からなんか聞いたのか？」

そう遊風は訝しげだったが、ちょうど一年前に校内で撮ったという写真を見せてくれた。

やはりポニーテイルで赤いローブ（今着ているものとは細部が異なる）を着ている遊風に無理矢理手を引かれる形で写真に納まった男。

五十代あたりだろう。

神経質そうに眉を寄せ、茶の短い髪で額には青い幅広の帯を巻いている。

目は琥珀のような濃密な金。

着ているものは漆黒の衣、とても戦い向きの、このタソガレにある戦士達が着用するものにも似た衣服でローブではない。

ありとあらゆる面において遊風とは正反対で、レノンはそれでも、ああこの人ならと思える何かを感じ取った。

「きつと、素敵な方でしょうね」

その言葉に、遊風はどこか嬉しそうだった。

「ああ、俺の自慢の片腕だよ」

さて、修理は終わりましたと青宝絶音を渡した。

遊風はしばらく刃を見て、輪郭がぶれないことを確認する。

「もう、大丈夫だと思います」

「そっか。何か俺が気をつけることとかは？」

レノンは、微笑。

「ないですね。あえて言うなら、お幸せにとだけ」

なんだそりや、と苦笑する遊風と共にレノンも笑った。

そういうことなんです、とだけ言う。

そして、

「ああ、そうでした。青宝絶音から伝言を仰せつかりまして」

につ、と笑みの浮かぶ口元、遊風の紫陽花色の瞳がこちらを捉える。

「『これから来るどんな破滅にも災厄にも僕は負けません。だから一緒に、皆でいいゲームをしましょう』と」

その言葉に遊風は一瞬口に乗せるべき言葉を失い、そしてすぐに青宝絶音の方を見て言った。

「当たり前だろう。皆、皆で世界を舞台に遊戯ゲームをしよう。他の何よりも、楽しいのを」

そうして礼をいい、報酬を聞いた。

それに答えるレノンは、じゃあキーキをと。

また剣核さんに迷惑かけますけどね、と言えば遊風は笑い、あいつは俺に迷惑をかけられるためにいるんだと言った。

「今度ケーキ持ってくる時には、剣核も連れてくる。青宝絶音の半分を作った男を見たいだろう？」

ええ、楽しみですとレノンは返す。

そうして青宝絶音を取り、この家を後にしようとして遊風は訊いた。

「そうだ、なあ、レノン」

「はい？」

「青宝絶音にとつての世界はフェンデラムだったか？俺と青宝絶音にとつての欠けてはならない場所は」

その問いには考える必要もなく、だからレノンはただ答えを口にした。

「とつても素敵な学校ですね」

自らの宝、学校を褒められて真紅は、だろ？と自慢げに笑った。

その手の中、もう一つの宝である青宝絶音が

一瞬だけ、笑うように瞬いて見えた。

（僕とあなたと、皆の世界で）

（ずっとずっと楽しく）

『黄昏庭』たそがれにわに存在する唯一の国、タソガレ。

そこに一人の青年がいます。

武器と話す青年が。

全ての世界において一人しか持たない異能の彼は
今日も全世界の人々の、問題を起こした武器と話します。

武器、カタルカタル

悩みを、鬱を、快楽を、闇を、己を、所有者を
幸いを

今日も明日も、お客さんは絶えません。

だけれどこの物語は、ひとまずここでグットアエンドゥールエント。

武器ワラウワラウ（前書き）

2話目は《巡りの朱姫》と《凱旋の女神》、その所有者の話。女子可愛いです。所有者と周りは自分の書いてる他の話の登場人物です。

武器ワラウワラウ

魔術軸第三分岐第六世界『黄昏庭』たそがれにわ。

その世界は、たった一つの大陸にたった一つの国。

国民達は争いを好まず、極めて平和に平和に暮らしていました。言ってしまうば、？心？がなかったのです。

こう改善してみよう、とか今の方法ではここがいけないと思う心が。

だから自然科学は勿論、魔術軸にありながらも魔術もほとんど発展していません。

この国は『タソガレ』と呼ばれます。

『黄昏王国』でも、『黄昏国』でもなく『タソガレ』。

タソガレには四季が無く、雪は降らず、焼けるような灼熱の太陽もありません。

農業を続けていれば飢えることもないこの世界では、人間同士の戦は過去の話となり、戦と言えばいつのころから現れた魔物との戦を表すようになっていました。

同時にこの国は、魔術軸のみならず他の軸にある異世界とも交流し、変わり者が異世界の文化：書籍や日用品を取り入れたりもしていました。

この国では異世界の存在は一般人にも知られていたのです。

魔術の発展していないと先に申し上げたこの世界で、数人の魔法使いが暮らしています。

異世界から見れば魔術などとは言えない、不格好で不完全な《それ》。

しかしそれは、異世界の誰も持つてはいない奇妙で特殊で目を引くものでもありました。

彼らの《それ》は学問として成立した魔術ではなく、彼らが普通

に生活する内に自然と発生したものでしたから、それも当然かもしれません。

Ladies and Gentlemen!

そろそろ始めることにしましょうか！

これから紡ぐは武器と青年と鍛冶師と世界の物語。

武器、ワエワエ

己を、未来へと、過去へと

そして何より大切な所有者を想い。

彼ら彼女らといつかの約束を見る為に。

同じ《世界》で明日を迎える為に！

今日お話しする物語の主人公は、二人同じご主人様を持つ《巡りの朱姫》と《凱旋の女神》。

二人はここにお願い事を一つ。

あなたをだいすきでいて、いいですか？

巡り終わらぬ姫は深く一度息をつきました。

自分の基礎を与えた《断罪》と

自分の身体を作った《鍛冶師》と

自分を振るい戦った《千刃鶴》。

己の傍にいてくれた、大切な人を想いながら、息を深く深くつきました。

二人の青年が、その世界にはいた。

正確には、二人きりしかいなかった。

「うーん…」

雲一つ無い青天の空の下、唸っているのは二人横に並んだうち右に座った、ぼんやりとした空色の髪と、濃い海の青色をした瞳の青年。

それを左の青年、漆黒の長髪に同じ色、切れ長の目を持つ青年が怪訝そうに見る。

「どうかしました？」

先程まで取りとめもない会話を交わしていた所、突然空色の方が何か考え出し冒頭へ至ったのだが、漆黒の方には彼が何を考えているのか解らない。

漆黒の問いに、空色は彼の顔を見て。

「いや、今何時ぐらいかなーと思って」

え？と漆黒は問い、数瞬中空を見つめて、あ、と声を上げた。

「ごごごめんなさい！つい時間を確認するのを忘れていて…！今朝の九時です…。それに…」

それに？と訊いた空色に、漆黒が返す。

「お客さん、来ちゃってたみたいですよ…」

え、と空色は返し、数秒間の思考停止。

はたと我に帰って。

「…お待たせしちゃ悪いじゃないか！ご免、帰るね僕！」

「あ、はい、ごめんなさいマスター！」

いつてらっしゃい、という声を聞きながら、空色は目を閉じる。

「今日も…頑張ってください…」

それが、空色がこの世界で聞いた最後の言葉だった。

「……………」

一人の男が、その部屋でどうしたものかと思案に暮れていた。

バランス良く鍛えられた長躯、濁った赤の短髪に、同じ色、怒っているかのように見えるつり目。

漆黒のスーツ、紺のネクタイを身に着けており歳は四十後半から五十半ば程と見える。

おかしな所といえ、寒くも無いのに濃緑の長いマフラーを首に巻きつけているところぐらいか。

彼の口から放たれた言語はこの世界のものではないが、苛立ちの感情がはつきりと読み取れる。

いらいらとした様子で彼は部屋を見回した。

この家、上司から教えられた《武器の病院》にやってきたのは無論依頼があるから。

まだ時間が早いようなら暫くどこかで時間を潰そうと思っていたのだが、玄関は開いていて。

小奇麗に片付けられた、応接間然とした一角…その奥にはごちゃごちゃと乱雑に様々なものが置かれている。

花瓶や置物、ぬいぐるみなど、本当に雑多なものが積まれていた。正面にあるドアの先には居住スペースがあるのだらう。

更に目を引くのは一面の壁に敷き詰められた重厚な本棚と、それを埋め尽す分厚い本。

右を見ても左を見ても、本ばかりだ。

その光景に男は僅かに眉をひそめ、左を向いて視線を止めた。

まないたやティーポットなどがのった机やシンクがある。客に何か出すための一角だらう。

そうしておいて、もう一度目の前へと視線を放る。

一对のソファ、左側に座った青年。

空色の肩までの髪、眠っているように閉じられている目だから目の色は解らない。

角縁の眼鏡をかけた、線の細い青年だ。

両の腕を絡める長い長い漆黒は刀だった。

なんの飾りも無い無地漆黒の鞘に収まった、長刀。

まるで刀が使えるそうには見えない体格をしている青年が刀を抱いて眠っている光景に、男はどうしたものかと思っていたのだ。

先ほど肩に手をかけ、揺らして見たが起きようとしなない。

あまりに静かなので死んでいるんじゃないかと脈を計ってもみだが、どうやら生きてはいるようだった。

これからどうしていいか解らず男がただただ途方にくれていると、唐突に背筋に緊がはしった。

人の気配。

男が職業柄身構え降り返った時、玄関が開け放たれると共に声が来た。

「いようレノン！起きて…あれ？」

男よりやや背の低い彼は、目の前に立っていた見知らぬ男に目をばちくりとさせる。

男よりも鮮やか、燃える焰のような赤を宿す髪と目。

ややほつれの見られるベージュの作業着を肩までまくって、はいているのは登山用のブーツの様に見えた。

「ああごめん、お客さんか。さてはレノン、また宗久むねひさと話し込んでたのか…。どうぞ？入って？」

彼の言葉を聞き、漸く男は翻訳が必要という思いに至ったのか右手を顔の前に翳した。

僅かな光がはしり、収まると口を開いた。

「すまん、もう一度言ってくれるか？今度は解る」

ああ、翻訳の魔術でも使ったのか？と彼は頷いた。

「たいした事言っていないんだけどね。どうぞ入ってください。俺は鍛冶師のジョシユア＝エビルソン。そこでちょっと《お話》してる武器のお医者さん、レノン＝コールの友達だよ。レノンだろう？あなたのここまで来た目的はさ？」

ジョシユアに導かれ、レノンと反対側のソファに座った男はあ

あと返す。

「上司に聞いてな、武器の不調を治す医者がおるつて。…俺は鶴恩^{かくおん}渡^{わたる}、魔術軸第一分岐第一世界から来た、魔道界の警察官や」

その言葉に、はい？と、紅茶を入れていたジョシユアは振り返る。表情は驚きだ。

「嘘だー！警察の人？正義の味方？」

渡は眉をひそめ、溜息。

「よう言われるわ。寧ろその敵側に見えるて」

「だって、失礼だけど悪人面だもんなあ…」

人間見かけによらないものだと思いながらジョシユアが、淹れた紅茶を自分、渡、レノンと三つのカップに分けてそれぞれに配る。

渡は礼を言つて受け取ったそれを一口含むと、ジョシユアに向かって問うた。

「それで、レノンは今一体何をしとる？」

「ああ、えつと…あれがレノンの《治療》なんだよ。ああやって武器に触れて目を閉じて、どうやってんのか良く分かんねえけど…意識の集中でもするとさ、自分と武器しかない《武器の世界》へ飛ぶんだ。《武器の世界》つてのは、大抵が所有者の印象深い、あるいは普段暮らしている世界によく似てるけど武器の魂以外に生物のいない世界らしい。でも俺も行った事ないからなあ。で、その世界で武器の魂と話して、武器の悩みを解決してやることで大抵の不調は治っちゃうらしい」

ジョシユアに聞かされた話がよっぽど珍しかったか、渡は暫く黙り何かを考え込んでいた。

先にジョシユアが問う。

「で、その問題がある武器は？先に見せてもらつてもいいか？俺武器大好きでさ、異世界の武器とか凄く興味あるんだ」

渡はジョシユアが先ほど、鍛冶師だと告げたことを思い出して、下手なことはしないだろうと判断。

「ああ、それはええけど」

渡は右手を横へとさし伸ばし、少し意識を集中。それだけで亜空間が解放され、収められていた物が姿を表した。

ずしりとくる重さを両手を使って支え、それを机に置いた。

見事な桐の箱と、紅蓮の布に包まれた細長いシルエットの二つ。

渡は二つの内、紅蓮の包みを取ると結ばれた紐を解いた。

途端にこぼれ出てきたのは、見事な軍刀^{サーベル}。

峰部分が真紅の色をし、刃と鐔が鋼色で、指と手の甲をカバーするように弧を描いた半月状の柄が黒。

良く手入れの行き届いた、美しい刀だった。ただ、

「真つ二つ……」

刀が、縦に真つ二つに割れているのだ。刃側と峰側、常識的にはありえない方向に。

「これが、異常？」

「ああ、いくら腕のええ刀鍛冶に直させても一度とマトモに使わんうちにこれや。いうても割れ方はランダムで、刃が木っ端微塵の時もあるし、柄だけ折れる時もあるけどなあ」

ジョシユアはその言葉を聞きながら、まじまじと刀を見ていた。

刃自体は綺麗なもので、砥いだばかりの新品にしか見えず刃こぼれ一つ見受けられない。

割れた切り口も真に綺麗で、無理矢理の切断といった様子は全く無かった。

と、そこで

「んあー……」

頭を二度ほど掻いて、この部屋の主が覚醒。

渡とジョシユアとは二人とも彼を見た。

ぼんやりとした深い青の瞳が開く。

と、客としてやってきている渡にも一言も何も言わぬまま、彼の表情はがらりと緊一色へと転換。

息を呑むような表情で、割れた刀へと手を伸ばした。

「……！ごめんなさい、説明も何もしている暇がない、すぐに行き

ます。ごめんジョシユア、お客様に説明とかよろしく頼むよ」

早口、一気にそれだけ言い切ると彼は目を再び閉じ、囁く。

それは呼びかけの言葉だった。

「君の世界を、僕に見せて下さい」

くん、と重力に従った僅かな身体の動きと共に、彼は再び眠り始めたように見えた。

その手を、赤い峰と白い刃とに分かたれている刀の上に置いたままで。

渡は今見た現象と、己の世界で行われるある魔術の術式が非常に似ている為おぼろげながら彼の行為を理解できた。

渡は学問としての魔術は苦手、持つのは戦闘手段としての魔術力のみ。

酷い言い方をすれば頭が悪い。

頭脳派の上司ならもつと良く理解できるのだろうと思いつながら呟いた。

「武器の持つてる”精神”と、自分の持つてる”精神”との共鳴か

？いや…《武器の世界》に行くって言うたな。自分を武器に潜り込ませる？」

「さあ？」

よくレノンを知り、何度もこの《治療》を見ている友ジョシユアは大げさに肩を竦め笑う。

いつも通り、彼の特徴、誰に対しても等しく放たれるざつくばらんな口調で。

「やったことないし出来ないからわからんね。レノンにしか、いや、レノンにも多分何してんのか分かってないだろ」

そうだ、と彼は立ち上がって、また台所となったスペースへ足を運ぶ。

「甘い物は大丈夫？なんかお菓子でも用意しようかと思うけど。なんと云つても…」

振り返った手には二つのチョコレートケーキが乗った皿があり、

なんとも言えない笑みも浮かんでいる。

「ちよつと長い二人のお話し合いになりそうだし。その間に色々聞かせてもらうぜ?」

ソファ―に座っていたのだから無論座った姿勢：膝を曲げた格好だった己の身が、何時の間にか直立し地を踏んでいることに気が付いたレノンは、はつと目を開く。

周囲に広がるのは紛れもなく武器の世界だ。

それがすぐわかるほど、周囲の世界は変質していた。

「やつぱり……!」

まるで、一枚のジグソーパズルが四方の端から崩れ落ちて行くように。

ひらり、ひらりと風に舞う世界の欠片。

風はレノンの髪をなぶる強さだが、不思議とその世界の欠片が身体のだこかしこに当たり痛いということがない。

静かな夜の世界。

きつと元の世界…あの赤い髪の所有者と共に暮らし、戦っていた世界の何処かの夜と同じ姿で、ただ生物がいらないだけの世界なのだろうとレノンは思う。

飛び散っていく正方形、三角、多角形、様々な世界の欠片達。

皆、輝く月、静かに煌く星、闇の黒が描かれているのが見てとれる。

中には暗い影の中にある杉の木や、何かの建物の一部だろう、硬質の灰色も見えた。

急いで前後左右を確認すると、視界に入る範囲にはまだ壊れて行く場所は見えない。

一瞬の安堵と思考、レノンはとりあえず前へ走り出す。

武器の持つ世界は所有者の世界に影響され、大抵が所有者にとつ

て重要な場所が基調となる。

彼の前にあったのは、大きな大きな、白と赤の色味を持つ城だった。

「お城…まだ依頼人の名前も聞いていないけれど、きつとあそこだと思う…！」

頼む、間に合ってくれと念じながら身体を酷使。

どうかこの世界が崩壊する前に、と。

ジョシユアの手から渡に渡ったのはチョコレートケーキともう一つ…一枚の紙だった。

丁寧な字で書かれた記入欄には、氏名、年齢、職種などという言葉が見え、渡は一緒に渡された万年筆で記入していく。

なんでも最近始めた方法らしく、治療に有用そうな情報を纏める為に依頼者自身に必要な情報を書いてもらうそうなのだ。

もぐもぐ、と顔に似合わずとてもおいしそうにチョコレートケーキを頬張るジョシユアは渡の書いていく情報を眺めている。

並んでいくのは荒っぽそうな外見にやや反し、角張ってはいるが整った読み易い字で。

「『武器の形態・軍刀』 『銘・在来業炎改』^{ざいらいごうえんかい} 『名称・輪風朱姫』^{りんふうあけひめ}…
ってどういうことだ？基礎魔力って訳の分かんないことも書いてあるし」

ジョシユアの疑問に、渡は、あ？と恐らく素なのだろうが空恐ろしいような低い声で万年筆を止めた。

「銘いうんはどの鍛冶師に打たれたもんかを示す名、名称は個人が武器につけた名や」

かち、と万年筆で一度机を軽く打つ。

「俺達の世界では、作られる武器の殆どは魔道武器でな。魔道武器いうもんは…『外殻』になる武器としての形と、『内側の要素』に

なる基礎魔力で作られる」

ジョシユアは暫く脳内で言葉を整理して。

「つまり、俺達の世界にある…この宗久のようなただの武器に、魔力つてのを付け加えると考えたらいいか？」

と言うと少し渡は黙って。

「いや、付け加えるいうか…武器を人間と考えた時、ただの武器を体とすると今お前の言うたんは服を着たり防具をつけるいうことやそうやない。その体の奥、遺伝子に魔術の力を組み込むと考えた方が近い。遺伝子の中に俺のような使用者の魔力を受け入れ、魔術を使い易うする情報を書き込む」

一度言葉を切って続けた。

「その仕事をするんが鍛冶師や。代々鍛冶を受け継ぐ家があつて、この輪風朱姫の銘にある在来は東国の鍛冶一族の名。それで、その組み込まれる魔力が基礎魔力。これは別に鍛冶師の魔力を使う訳やなくて、普通使用者に武器を作つてやろうと思う依頼人が使用者自身の魔力を鍛冶師が預かつておいて数週間かけてゆっくり武器の隅々にまで渡らせていく。鍛冶師自身はその過程で自分の魔力を使うて、依頼人や使用者の魔力を武器に組み込んでいく」

「あーっと、分かった。OK。でも話聞いとるとき、そうやって作られる武器なら愛着も湧くんだろ？その輪風朱姫はどうやって出来たんだ？誰かに貰ったのか？」

渡は沈黙、記入シートに視線を落として。

これから書くこうと思つたのに先に話すことになるのか、二度手間だと思いまあいいかと語ることにする。元来彼はそれが伝わるかどうかは別として己を伝えることを厭わない性格だ。

指差されるのは記入シート、一つの名。

「ここに書いたように、基礎魔力を与え、俺にこの武器を寄越した男は白虎切言びゃくこせつごんという名や。もう何十年も前、俺が魔術校の高等部を卒業して警察…魔道警察に入った時に渡された。切言は俺より十一上で随分歳は離れとるけど、同じ先生を尊敬して学んだ。そのこ

とについては話す^さと長^{なが}うなる。ともかく、白虎切言^{はくこ}という男が輪風朱姫^{りんふうしゅぎ}の片親^{かへん}や。切言^{きげん}は俺^{おれ}に長^{なが}う使える刀^やをと思^{おも}うて東国^{とうこく}の名門^{なもん}・在来^{ざいらい}の十七代目^{じゅうしちだいめ}、在来^{ざいらい}官助^{くわんすけ}という堅物^{かたもの}ジジイに己^{おのれ}の魔力^{まくりき}を渡^{わた}して、『全^{ぜん}てを注^つぎ込んだ最高^{さいこう}の一^{いち}刀^{とう}を』と依^よ頼^{らい}した。それで出来^{でき}たんが当時^{たうじ}の在来^{ざいらい}が最高^{さいこう}とした一^{いち}刀^{とう}、在来^{ざいらい}業炎^{げつえん}の改良^{かいりやう}型^{けい}・在来^{ざいらい}業炎^{げつえん}改^{かい}。武器^{ぶき}には女神^{めがね}の加護^{かご}をて女性^{にょせい}名^なをつける魔道警察^{まどうけいさつ}の慣例^{かんれい}に従^{したが}って、切言^{きげん}が輪風朱姫^{りんふうしゅぎ}と名^なを付^つけ俺^{おれ}に渡^{わた}した。名前^{なまえ}が長いんで普段^{ふだん}は輪風^{りんふう}としか呼^よばんけどな」

それからずっとずっとの付^つき合^あいで、ほんの数日^{かずにち}前^{まへ}までは実戦^{じっせん}で使^{つか}っていたのだ。

全く^{まるく}なんで突然^{とつぜん}こんな不調^{ふてう}が起^おこったか、ともう何度^{なんど}も思^{おも}ったことを渡^{わた}は繰^{くり}り返^{かへ}す。

「輪風朱姫^{りんふうしゅぎ}は切言^{きげん}の魔力^{まくりき}を基礎^{きそ}においてるから風の魔力^{まくりき}を宿^{やど}してる。切言^{きげん}は一応^{いおう}えらい魔道士^{まどうし}や、その魔力^{まくりき}を持^もつ刀^やの輪風^{りんふう}は今^{いま}までおかしな^しな^なったことは一度^{いちど}も無^ないし、折^おれたこと^{こと}もろくに無^なかった。それ^{それ}が数日^{かずにち}前^{まへ}からこれ^{これ}や」

「なるほどね。そりや驚^{おどろ}いたろ」

まあな、と返^{かへ}して渡^{わた}は回^{かへ}想^{そう}する。

驚^{おどろ}いたなんて物^{もの}ではな^なかった。

魔道警察^{まどうけいさつ}の仕事^{しごと}…異形^{いせい}と呼^よばれる化け物^{まけもの}の討伐^{たうはく}にその日^ひも赴^{おもむ}いていたのだが、異形^{いせい}との乱闘^{らんとう}中に突然^{とつぜん}輪風朱姫^{りんふうしゅぎ}が碎^{くず}けたのだ。

ガラスの花^{はな}瓶^{びん}を落^おとしたように、バラバラに碎^{くず}け散^ちった。

なんとかその時^{とき}には魔術^{まじゆ}と他の武器^{ぶき}とで乗^のり切^きったが、それからず^ずっと輪風朱姫^{りんふうしゅぎ}は様子^{ようす}がおかしい。

何度^{なんど}鍛冶師^{たんぎし}に直^{ただ}させても、すぐどこかが壊^{こわ}れてしま^{しま}う。

初め^{はじ}めは異形^{いせい}に何^{なん}らかの術^{じゆつ}をかけられただけだろ^ろうと思^{おも}っており、知人^{ちにん}の魔道士^{まどうし}や上司^{じょうし}…い^いずれも世界^{せかい}でトップクラス^{とっぷくらす}の魔道士^{まどうし}達^{たち}に調^{てう}べてもら^{もら}ったのだが誰^{たれ}の口^{くち}から返^{かへ}る答^{こた}えも『魔術^{まじゆ}的に見^みれば何^{なん}の異^い常^{じょう}も無^ない』だ^だった。

完全^{てんぜん}に原因^{げんいん}不明^{ふめい}の事態^{じたい}で困^{こま}っていると、上司^{じょうし}が告^つげたのだ。

武器の医者がいるそうだが行ってみるか。

人手が足りなさすぎる魔道警察にも関わらず、上司は行ってくるなら二、三日休みをとってやってもいいと言って来たのだ。

それもこれも、自分がどれだけこの武器を大切にしてきたかを理解しているからだということが態度から読み取れた。

だからありがたくそうさせてもらい、世界を渡ってここにいます。ついでに輪風朱姫ほどではないが多少調子の悪い武器がいるのでそれも診てもらうつもりだ。

「あ、ところで全然関係無いんだけどな」

唐突にジョシユアが人差し指を立てた。

「あ？なんや」

「なあ、ちよつと暑くないかそれ？取ったら？」

指差したのは渡の首にぐるぐると巻かれたマフラーで、渡は少し顔色を変えた。

「ああ、これは取らんほうかええんや。醜いもんを人に見せん為に付けてるもんやからな」

ジョシユアがその言葉の意味を測り兼ねていると、渡はやや困ったように笑う。

「仕事柄、恨みを買うんでなあ。今まで逮捕してきた魔道士の中の何人かに呪われとる。首にかかっている分が気味の悪い痣を作っている、それを抑えて生き長らえられるように上司の封印錠がかかっているのを見えんようにしてるんや」

「……あー…なんか悪い。イタイとこついっちゃったみたいだ俺」
構わん、と渡は一度座る姿勢を直した。

「お前のその、かなり年配の俺にも口調を直さんとことか気に入ったわ」

あ、俺これが素なんだけどなあ…となんだか微妙な気分を味わいながらジョシユアはちらりと友を見る。

輪風朱姫に手を乗せ彼女の世界に行つたまま、まだ帰ってこない。『じゃ、まだレノンは帰ってこないみたいだし今度はその『上司』

の話、聞かせてもらえないか？渡さん、あんたをここに案内した人なんだよな？」

「……ッ！」

眼前の光景に、レノンは息を詰めて駆け寄った。

赤の城の中はまだ外のように崩れ始めている。

城の中にはクラスと学年を表示したプレートが幾つもかかり、『職員室』や『特別教室』というプレートもあった。

そう、赤い城は学校だったのだ。

夜なのに火が灯っておらず、視界はいいと言い難い。

唯一明かりと言えるのは、未だ崩壊の侵蝕を受けていないのだから、輝き続ける満月の光。

こんな危急の事態でなければゆっくり鑑賞したんだけどね、と思いつつながらレノンは走っていた。

そして発見した。

学校の中を走り回り、自分以外にただ一人この世界にいるはずの『武器』を探したレノンは、漸くここで見つけたのだ。

まず踏み入れたのは大きな四角い机が一つ、椅子が十脚ほどある会議室のような部屋で、

奥に開いた扉。

中へ踏み入ると、がらんとした部屋にグランドピアノが一台置かれていた。

敷かれた赤い絨毯、幾何学の模様がうつすらと描かれたその上に『彼女』は身を投げ出し倒れ込んでいた。

美しい鋼色の長髪は、頭頂部から半ばにかけて赤い色を宿しており後ろで一つにくくられていて、肌は病的なほど白い。

纏っているのは髪の赤よりも朱色に近い赤の衣で、背側が見えているそれはゆつたりとしたワンピースの形。

腰の辺りに銀の、ベルト代わりの紐がついている。

足は素足のままで投げ出されていて、やはり色が白く傷一つ見当たらない。

レノンには彼女のすぐ横まで辿りつくと、彼女を抱き起こす。

これで漸く見えた顔はよく出来た彫刻の像のように整った顔立ちをしており、

……まるで箱入りのお姫様のような……

そんな事を考えながら、レノンは彼女の肩を揺すり声をかけた。自分しかいない世界で誰かが呼びかける。

それがどういうことか、彼女には解るだろうと思い。

「お願いします…起きてください！！あなたの声を、聞きに来たんです……！」

果たして願いは聞き届けられた。

ゆっくり、ゆっくりと彼女の瞳が開く。

予想されたその瞳の色は、やはり炎のような朱と赤の交じり合う、美しいものだった。

その目は、ゆっくりとレノンの姿を捉え、ピントを合わせる。

「……………あ……あなた」

「僕はレノン＝コール。あなた達と会話できる異能者です。あなたの所有者の方が、あなたがおかしいと思って僕の所へ連れて来てくれました。一目見て、あなたが余りもたないことが分ったからすぐにこちらへ来たので、その方のお名前も、あなたの名前も分からないのですけど」

そうレノンが告げれば彼女は無邪気な笑みを作った。

レノンと同じか少し上、充分に大人に見える彼女が作るには子供っぽい笑顔で。

「ありがとう……私は、輪風朱姫…輪に、風、朱色の朱で朱、で、姫と書くの。りんふうと、呼んで。私の、所有者は……渡さん、鶴恩渡さん。《鶴の恩返し》、で鶴恩、渡は…さんずいに一度の度よ」なるほど、とレノンは自分も知っている『漢字』、字面を考えて

頷く。

「素敵な名前です」

そう言えば、彼女は嬉しそうにありがとうと言った。

「……………あなたと、…ながくお話したいけれど……………時間が無いわ…

…」

「はい。分っています。だから」

彼女の手を取った。

小さな手、細い指だ。

今から壊れて行く、小さな体だ。

「……………あなたが渡さんに伝えたいことを、僕に託して下さい。僕は、あなたの思いを渡さんに伝えることができる」

うん、うんと嬉しそうに彼女は頷いて。

「っ……………」

一つ涙を零した。

「話すより、こうしたほうが、早いから」

「え？」

レノンが疑問の声をあげるが早いか、それは起こっていた。

緑色の光の、複雑な幾何学模様の描かれた円陣が二人の周囲に起動している。

これは？というレノンの声に、彼女は一度レノンの手を強く握って答える。

「……………私は、魔術の…武器だから…私の記憶を、大切な思い出を、あなたに見て欲しいの……………」

今度は少し寂しげに、笑う彼女。

「私を作ってくれた……………二人のひと……………渡さんの……………記憶を……………」
刹那、レノンの視界は白に染まった。

巡る力持つ朱姫は思い出す。

己を愛してくれた三人と、己の始まりを。

気付けばレノン、また別の世界に立っていた。

「え……」

友のジョシユアの家にあるのと似た炉とハンマー、それに鋳型。鍛冶場だ。

眼前、二人の男と少年が一人いた。

彼等はレノンの上げた戸惑いの声に全く気付いていない様子で、気難しそうな黒髪短髪、手拭を首にかけた老人に、全く奇妙な色……真っ白の髪の上に虹色のフィルムをかけたかのように輝く、獅子のようにくしゃくしゃとした髪 of 青年が身振り手振りを交え楽しそうに話している。

瞳はおかしな事に、左目は飴玉のような緑、右目は空の青色だった。

初老は直線的なフォルムを持つ布、彩度を落とした青い着物を纏っており、青年は豪華絢爛な、白の上に銀で様々な刺繍が施された美しい羽織を着ているのに、その下には極々安物と見える濃緑の着物という不思議な服装である。

「それで」

黙って頷いたり首を振るだけだった老人が声を上げた。

低く、鍛冶場に響き渡る声だ。

「今日は渡の武器を取りに来たのではないのか馬鹿者」

そう言われて、青年は目をぱちくりさせて、ああ！と手を打った。漸く気が付いたというように。

「そうだったそうだった！すっかり本来の目的を放置してた！」

見守るレノンは、あの人はなんだかジョシユアに似ているなあと思う。

いわゆる愛すべきお馬鹿さんジャンルだ。

「ねえー」

唐突に声を出してみたレノンは、やはりと頷く。

自分の声はこの世界の誰にも聞こえなくて、自分はこの世界の観客でしかないのだと気が付いて。

では続けて見守ることにしようと思う。

眼前では老人が青年に溜息をついて、背後から一つの箱を出した。穢れの無い細長い木の箱で、蓋に文字がかかっている。

青年が少年を手招きで呼ぶ。

背は青年より高く、つり上がった目をした赤髪と赤目の少年。

軍服のような灰色の衣を纏っている。

レノンには確かに、その少年に見覚えがあつて。

……渡さん、ですね

きつとそうだろう、と一人頷く。

老人が木箱の蓋を取って、まずはその蓋の文字を指差した。

「在来が最高とされた軍刀、在来業炎。その後継刀として打った、わしの持てる技術全てを注ぎ込み作り上げた至高の刀。銘を『在来業炎改』という」

躍るような力ある毛筆で書かれた文字は確かにその銘を書き、隣に鍛冶師の名が記されている。

在来十七代目、在来官助と。

無骨な老人の手は箱の中へと入り、中のそれを取り出す。

目を焼けつかせるような朱色の布に、青年がおおと声を上げる。

そこにあつた机に一度置くと、布が取り払われてゆく。

現れたのはとても美しいその姿で。

と、レノンは疑問を抱いた。

これは彼女の記憶のはずなのにどうしてこうやって彼女が見えるのかと。

あとで聞いてみる必要がありそうです、と思う。

現れたその刀に、初めて少年が興味を示した。

むつつりとしていた表情を変えた。

「さあ、振ってみてくれ」

老人がその刀を差し出す。

刀には、鞘が無い。

「鞘など、これには要らない。魔道警察に入るのならば亜空間に武

器を封じることになるのだろうし、それに」

老人の表情は、笑みだ。

自信に満ち溢れた笑みだ。

「わしと《断罪》の合作の刀だ、斬ろうという強い意思にしか手を貸さない」

少年は差し出されたその柄、くると半月状になったそれを一度撫でて、老人の手に重なるようにして取った。

ひゅ、空気を切る音と共に一度空を斬った。

「……名前」

少年は、低く不機嫌そうな声で問う。

すると答えたのは青年。

彼は楽しそうに笑い、告げる。

「今、俺が考えてやったよ。彼女の名は輪風朱姫。巡って終わらない不断の力の象徴であり、かいり湮の野郎に通じる輪。風帝と称する俺の操る力、決して穿たれぬ自由の風。朱色は彼女の冠する色、お前の得意な焰の色。そして、野郎のパートナーだったらやっぱお姫様だろう？」

老人が一度満足げに頷き、良い名ではないかと呟く。

少年はじつと刀を見て青年の方へ向いた。

表情は、ふっと緩められた、僅かではあるが確かな笑みで。

「ありがとう、切言せつごん」

ははっ、と声を上げて切言と呼ばれた青年は笑い。

「渡に感謝された！明日は何が降るやら、怖い怖い」

肩を竦め茶化すように笑って、その延長で少年に言った。

「頑張れな。俺と二人と、その上にも、遊ゆうな風にも負けない位に。お前は、俺達の中で一番湮を支えられるんだから。《先生》のいない世界で…湮の支えになってやってくれ」

どうか、と青年はやや自分より背の高い少年の肩に手を置いて。

「どうか渡の未来が、自分の手で作られるものであるように。どうか輪風がその助けになるように。そうして願って、俺と官助のじい

さんとで輪風を作ったよ。渡の好きにすればいい。好きなものを、好きなように斬って、好きなように護れ」

その時、唐突に世界の終わりがやってきた。

気が付けばレノンのは元の通り、彼女を腕に抱き起こした姿勢で周囲の陣も消え失せていて。

彼女の顔を見れば、ふふ、と笑っていた。

「……見て、くれたでしょう……？ あれから……私と渡さんは……もう四十年近く、一緒に戦ったの……」

「はい。確かに、見せて頂きました。幸せな、記憶を」

「ええ、幸せだった……」

はらり、流れた涙をぬぐう力は、もう彼女には無い。

「幸せが……ずっと、続くとは思っていなかったの………きっと、渡さんが先に逝ってしまうんだろう、って……よかった……一人で、私は寂しい思いをしなくても………いいのね………」

「……でも、渡さんは寂しい思いをしますよ？」

いいんですか？と問うレノンに、彼女、輪風朱姫は頷く。

「渡さんを支えてくれる人……私と同じような武器………どちらも、沢山いるから………。私には……渡さんだけだったけれど………」

うん、と頷いて。

「伝えて、下さい………渡さんに……。湊さんといつまでも仲良くお元気で………」

湊、という名前は物覚えの悪いレノンにも聞き覚えがあった。

先ほど彼女の記憶の中で聞いた名だ。

渡が支えになって欲しいと、切言という青年に望まれた名。

忘れないように。

脳に刻みつけてレノンは頷く。

「それから……私はあなたの為に望まれ生まれてきて、あなたと戦ってきて、本当に幸せでした、と……」

「はい。必ず、お伝えします。それから」

まだどうか目を閉じないで、とレノンは願い、聞いた。

「あなたは、体をどうして欲しいですか？何処かに埋めて欲しいですか？海に沈めますか？それとも……」

そうね、と考える吐息を吐いて、それから彼女は口にする。

「体を、綺麗に直して、それから……武器として、価値の無い私だけれど、使えない武器だけれど……傍に、置いていて欲しい……私は……渡さんの傍にいたい……」

分かりました、とレノンが返して微笑むと、彼女も笑った。

笑顔の美しい彼女だが、その笑みはレノンがこの世界で見たうち一番美しいものだった。

それは、壊れ逝く儚さを内包するからなのだろう。

ごめんなさい、もう、いくわ

そう彼女が告げた世界を、崩壊が包み込む。

一気に世界のピースが乱れ飛び、激しい風に目を閉じるその一瞬。ただその一瞬で、確かにレノンが立った地平、確かに存在した彼女の世界は一瞬にして崩れ去り

「！」

かつ、と小さな音と共に、矢は大きく的を外した。

世界は魔術軸第一分岐第一世界『クインテット』、位置は南国シヤルドヴァイゼンに領地を持つ白虎家の庭。

矢を射ったのは弓の名手と名高い諸肌脱ぎの老人、左目は緑、右目は青で、短く切られた白髪にはオパールのように虹色を宿している。

「どうしたのだ親父殿？外すなんて……」

後ろから声をかけるのは息子だろう、額に飾り帯を巻いた、同じ色の髪に、左目が金、右目が青の男。

しかし矢を射った男は彼に振り返らず、ただ呆然と空へと視線を逃がし、ふうと至極辛そうに目を細めた。

「そうか、輪風…お前、官助のじいさんのところに行ったのか」

弓を手放すと、不思議そうにこちらを見る彼は放っておき、手を組み祈りを捧げた。

「…俺達のお姫様、どうか君の騎士を天より護ってやってくれ。鶴が己で望んだ空から、決して落ちぬように」

「あ……………」

「レノン！帰ってきたのか？」

顔を上げれば眼前、友人のジョシユアと依頼人、四十年の時を経て成長した少年、輪風朱姫の所有者がいた。

己が手を置いた鋼からはもはや応答がなくて。

全てが終わっていた。

レノンは参ったな、と微笑んで。

「先ほどは失礼しました。鶴恩渡さんですよ？輪風朱姫、彼女にお聞きました」

「……………ああ」

それだと聞く渡は、もしかしたら何が起こったのか知っているのかも知れないとレノンは思う。

「彼女の精神は今、亡くなりました。僕に、彼女があなたへと渡った時の記憶を見せてくれて、あなたへの言葉を託して。それを今、伝えます」

一度言葉を切る。

渡の赤い目がこちらを見ていた。

「湮さんといつまでも仲良く、お元気でと。それから、この体を直していつまでも傍に置いて欲しいそうです。もう武器として役に立つことは出来ない体だけど、と」

それを聞いた渡は瞠目、そして、ふんと面白くなさそうに言った。

「どいつも、こいつも……」

告げられる言葉は、優しい悪態だった。

「俺に優しすぎるわ、阿呆」

（　　ずっと、私はあなたを）

（想い続けています…）

凱旋の女神はずっとずっと想っていました。

ただ一人の主のことを。

凱旋の女神は神聖な力、護りと再生の力を与えられていました。

その加護の力は主の為に使われました。

女神は己が生まれた日から、主の鶴を愛していました。

鶴は皇帝陛下と鬼と、孔雀、獅子、断罪・制裁・鉄鎚の三人組、

悲哀雷、それに、真紅…

皆に囲まれて毎日を楽しそうに過ごしました。

皇帝陛下はこの世を去って、それでも女神は皇帝陛下の願いを聞

き届け遂行し続けていました。

鶴を一人にしないように。

鶴が鬼の為にいられるように。

凱旋の女神は今も想い続けています。

月の輝く夜。

かつん、かつん、鋼を打つ音。続く音。

生み出すのはジョシユアで、ここは鍛冶師である彼の家の鍛冶場

だ。

彼が真剣な顔で手掛けるは、峰が赤く染まる軍刀：輪風朱姫。武器と話す友、レノン曰く既に精神が死んでしまった刀を、ジョシユアは直す。

もはや彼女の体が勝手に壊れることはないのだから。

精神の死んでしまった武器は、著しく攻撃の威力や使い勝手に落ちちてしまう。

所有者であり魔道士である渡が言うには、彼女の体と内部にある基礎魔力とが完全に乖離してしまっており、魔道武器としてまともに使うことは出来なくなってしまうという。

最早戦場に立つ必要のない体を、ただ所有者の傍に在る為に、ジョシユアは打ち直してやる。

なるべく他の金属を足すことがないように、彼女自身の鉄を使つて。

何度か友に頼まれて武器の『死装束』を整えてやったことはあるが、何度やっても気分のいいものではない。

…使われる姿じゃなくて、もう変わらない姿を作るんだもんなあ…

「もう一つの方は、助けられるといいな」

そう言つて、あの友なら助けるだろうと彼女の手入れを続けた。

一段落着いたら友の家へ行つて、色々渡に聞きたいこともある。

そう、レノンは輪風朱姫との対話で消費した気力を回復するのに一晩を必要とするので、彼の家に渡が泊まることになったのだ。

明日、レノンの午前中の予定：学校での授業が終わった後、渡が持ってきたもう一つの武器の治療を行う事になっている。

ジョシユアは告げられた彼女の名前をなんとなく考えたか暫く考える。なんだかごちゃごちゃとした名だった。

「ええと……」

鉄を叩く手が止まって、そうして思い付いた。

「ああ、そうだ。トライアンフ」

脳裏に描かれるその名は G o d n e s s o f T r i u m p h .

冠する意を、

「《凱旋の女神》」

丁度その頃、レノン是一个の武器を撫でていた。

扉の奥、掃除が面倒なので普段使っていない部屋を片付け渡の泊まる部屋として、彼に先に風呂に入ってもらっている。

全長は二十センチないぐらいの両刃の短剣だ。

白い柄と金の鍰を持ち、その鍰はまるで車輪のように四つの穴がくり抜かれている。

刃の根元に真紅の宝珠が嵌まり、最も特筆すべきは銀の鞘と刃として物を切り裂く部分より内側に共通して施された意匠だった。

赤い色彩一色で描かれた、空を舞う一匹の鶴だ。

そうしてレノンは左手の中にある紙を見る。

渡が書いたこの武器の調査書だ。

『武器の形態・護刀、短剣』 『銘・西国石塚白雲真改』 『鍛冶師：

西国石塚三代目・石塚旗章』 『正式名称・Godness of

Triumph 意を、凱旋の女神』 『呼び名・トライアンフ、トリイ』。

武器の特徴として綴られた次の文章にはこうある。

『内側に込められた魔力を消費することで所有者の身を護り、負傷次にはその傷を癒す。基礎魔力は先生と慕っていた《皇帝陛下》法師篤実。補填魔力は完成当時は法師篤実のものだったが、完成から

一年足らずで亡くなった為、その補填魔力が尽きてからは現在の魔

道警察のトップ、同時に共に法師篤実を先生と慕っていた盟友、《

悲哀雷》一世聖のもの』

危険な任務に赴く時懷に入れているとあり、付け加えるか否か迷つての末だろう、やや行が空いて、あった。

『トリイは所有者である自分だけのものではなく、魔道警察西国支部の皆に支持される女神である』

「人の子を護る、優しき女神様が…」

レノンはきつとまた素敵な人なんだろうね、と一人で頷いた。
彼女、トリイの体はそれはそれは美しい。よく手入れがされているのもあるが、護り刀ということで実戦では用いられず元から痛む機会がないからということもあるだろう。

それでも、輪風を見た時にも感じた事だがよくよく手をかけられて大切にされているのが伝わってくる気がした。

それは渡が己の武器をただの武器、道具としては考えていないということ。

「もしかしたら僕と渡さんは似ているのかもしれない」
そう呟いて、レノンはソファアの背もたれに身を預けた。

今日、輪風の世界で経験した彼女の死は普通に話をするのよりずっと堪えた。

「……」

なんやこのデジャヴは、と風呂から上がった渡は思った。

レノンがソファアに座ったまま寝こけている。

デジャヴとは言っても、あの時とは違いレノンは武器と話してはおらず普通に寝ているようだ。

とりあえず顔に似合わずなんだかんだで優しい性質を持つ渡だ、放っておくわけにもいかず周囲を見て毛布を発見。

適当に広げてかけてやった。

すると

「あ……すいません」

「……なんや、起きたか」

レノンは慌ててかぶりを振り、渡をその目に映して眼鏡を上げて眠たい目を擦った。

「つい寝ちゃってたみたいです……じゃあ、僕もお風呂に入りましようかね」

風呂上りの渡は白いワイシャツ姿で、首元を覆っていたマフラーは無かったが一番上のボタンまできっちりと留められていて。

ふと目をとめたレノンのは、そこに異質を見る。

白いシャツを透けて猶も届く異質の色。

焼け爛れたようなどす黒い皮膚が、首元、蛇が巻きついたが如くの歪な螺旋状に走っているのが分かる。

レノンの視線に気が付いた渡が、はっとして咄嗟に右腕を上げ首元を覆う。

「悪い、マフラーでも巻いとくべきやった」

「え、いや、あの僕こそごめんなさい」

レノンもジョシユアから聞いていた。

彼の首に刻まれているのは、警察官の彼を恨む魔道士達がかけた死と苦しみの呪い。

それを上司が封印錠なるもので押さえ込んでいるから、彼はまだ生きていられるのだと。

そのことを思つて、レノンは言う。

「あの、明日はトリイの治療の前に、まずお話を聞かせてください。何か役に立つこともあるでしょうし」

何のだ、といった疑問を表情に出した渡に対して言葉を足す。

「ここに書かれた二人の人物、それに、渡さんをここへ案内した上司の方のことも」

それを聞いた渡は確かに、ああ、と頷いた。

翌日はからりと晴れた。

この町の学校で先生をしているレノンは朝早く起きて授業の準備をし、渡と、昨日の晩やってきて結局泊まっていた友ジョシユアと共に朝食を摂り学校へ出かけた。

今日は昼で学校が終わりなので、昼に帰ってきたら三人昼食を食べて凱旋の女神の治療に取り掛かることにした。

その話をした後ジョシユアは本業、町の鍛冶屋として父を手伝う

為に鍛冶場へと帰り、渡はと言えばあてがわれた部屋で眠っていた。普段年中無休で働いているので、寝られる時に寝ておこうとの判断からだ。

すると突然彼の耳の中でその音は響いた。

笛を強く鳴らしたような、高い音。

それに渡は顔をしかめると、がばと起き上がり懷からシンプルなペンのようなサイズの黒い筒を取り出す。

これは魔道警察で使用されている型の、渡の世界での連絡機器である。

ホログラム表示も可能な代物だが、現在設定は音のみにしている。耳の中の音が途切れると同時に、その音は男の声に変わる。

『連絡もよこさんでええ度胸やなおい』

「ああ、そら悪かったな。で、なんや用件は」

相手は渡の一つ年上の上司……渡をここへ案内した上司だった。

『それがですね長官！』

唐突に割り込んできた声があった。それは渡の部下の青年の声で。鶴恩長官がいないと、支部長がどうも調子出ないんですよ。俺達

じゃあご飯食べてくれませんし……』

『始終イライラしてて近づきづらいですし！』

『ちょ、やかましいわお前等！黙っとけ！！』

上司の低い怒鳴り声、部下達がひいと声を上げて黙った。暫く沈黙していた渡は多少怒りを覚えながら。

「……お前……昨日の晩何食べた」

答える声は当然、というように。

『チョコレートケーキ』

「他には」

『以上』

渡は頭を抱えるようにして溜息。

この上司は中学生時代からの付き合いで、その頃から食は細かったがその頃はまだ普通の食生活だった。

それが世界でも一、二を争う劣悪な労働環境の職場、魔道警察に属してからは体調が常に微妙に悪い状態で（まあ原因はそれだけではないが）、食欲がほぼ無くなっている。

普段は自分がなんとかして食わせているのだがその自分がいなくなると思うこれである。

基本が優等生で他に困った行動をしない彼だから、余計それが異常として目立つ。

「…今日帰る。俺が帰るまでになんか食うとけ」

その言葉に、相手があからさまに舌打ちするのが分かった。

「それで、なんや用件は」

『切言さんが言うてた。…輪風が《死んだ》って、本当か？』

一瞬渡は驚くが、切言が輪風朱姫に魔力を与えた人間だから分かったのか、と思う。

そういうこともあるのかもしれない。

「ああ。レノン…武器の医者言うにはそうらしい。割れてたんはこっちの鍛冶師に直して貰うたけど…基礎魔力と金属が乖離してるもうマトモに武器としては使えんな」

そうか、と一言相手は返す。

『分かった。後トリイ直したら早う帰って来い。頭悪いのでも、おらんと手が足りんからな』

何か返す間も無く通話は切れて、渡は暫く何故彼が大した用でも無いのに通信を送ってきたかと考えてすぐにそれを放棄。

自分より頭のいい彼の考えなど分かるはずが無いと、もう一度眠りに落ちた。

輪風を亡くして、いい気持ちはしていないだろう彼を元気づけよう（？）としてかけてきた上司の気も知らないで。

ジョシユアを連れて帰ってきたレノンはすぐにチャーハンとスープを作って二人に振る舞った。

その昼食を終えると、ブラックコーヒーを淹れた。

渡は何も淹れずに飲んだが、二人は二人ともぼちゃんぽちゃんぽちゃんと沢山の角砂糖を落として、ミルクもたっぷりと。

…それだけ甘うするんはコーヒーへの冒瀆や…

渡はそう思ったが口には出さなかった。

「それで…」

ティースプーンでかき混ぜ、角砂糖を溶かしながらレノンが言った。

眼鏡が湯気で曇り、どうもやりにくそうである。

「お話を聞かせてもらってもいいですか。治療へ入る前に。武器の世界は所有者にとって大切な場所が投影されます。恐らく、トリイの持つ世界も渡さんにとって大切な場所。なら、先にお話を聞かせてもらった方が世界で彼女を見つけやすいんです」

渡は一度頷いて、コーヒーのマグカップを一度置いた。

「レノン、お前に聞いた輪風の世界…赤い城は俺と、これから話す奴等と一緒に過ごした《皇帝陛下》の学校や。西国の魔術校グルデーン。ソーサラー、魔剣士を育てる騎士の校」

皇帝陛下？とジョシユアが首を傾げる。

「偉い人か？」

「そう呼ばれてた。王様のおる世界で、その人柄から呼ばれ名が《皇帝陛下》やったんや。グルデーンの校長先生、数多くの魔道士を育てた大先生や」

一息をついて、どう話したのかと思考。

そして考えるのが面倒だと思い、右手に意識を集中。

周囲に現れたのは蒼の光を放つ陣。

「レノンが、輪風の世界で遭ったのと同じ、記憶の再現や。術名は回想…俺の世界の見え方で、俺とは違った視点を持ち俺の記憶を見る。これで見せたるわ。白虎切言、一世聖、法師篤実、それから」
光がより強くなる。

「鬼島涯、俺の上司との記憶を」

一緒にいつて来い、というわけの分からない言葉と共に、二人の

視界は同時にブラックアウト。

レノンが気が付いた時には、そこはある部屋だった。
見覚えが…ある。

輪風朱姫の世界、彼女が倒れていたピアノの部屋の一つ手前、会議室のような部屋だ。

明るいい日差しの中の会議室らしいその部屋に二人は立っていた。
そう、隣にジョシユアがいる。

「うおおおお！？何、なんだこれ？」

「あー、うん。僕は一度輪風に見せられたよ」

慌てまくって自分をかくかく揺すってくる友に、レノンは言う。

「この世界では僕達…この記憶から言う《部外者》達の声はこの記憶の人々に聞こえないし、姿も見えないんだ。僕達は記憶の観客でしかない。渡さんが見せたい記憶が終われば、元の場所へ戻れるよ」
レノンの説明を聞いて落ちついたのか、そうかとジョシユアは頷いた。

すると聞こえてくる音がある。

ピアノだ。

滑らかに流れるピアノの音。

行ってみようとレノンが声をかけて、二人で奥の部屋へと向かう。
扉を開けばグランドピアノを弾く初老の男がいた。

腰まで届く長髪は氷のような薄青、笑んでいるような優しい瞳は濃青。

腰に剣を帯びれば完全な騎士の姿となるだろう、赤のマントを纏った姿。

城の内装、マントを含む衣服と周囲の全てが赤系統の世界で、青い彼の頭だけが異質に思われた。

なだらかに、頭を撫でられているような優しい音が耳を刺激して

いく。

「……ジョシユア、この人が」

「ああ。多分、この人が《皇帝陛下》だ」

そう思わざるを得ないような、大きな力を二人は無条件に感じていた。

「でもさ、どうしてこれが俺達に見える？」

ジョシユアがレノンに問う。

「『違った視点で、俺の記憶を見る』って渡さんは言ったよな？でも違った視点でもなんでもさ、渡さんがいなきゃ《記憶》じゃないだろ？」

ああ、そのこととレノンは笑う。

「よく気付けたね？」

「あれ？俺馬鹿にされてる？」

さあね、とレノンは楽しげに。

「僕も…輪風の世界でも思ったんだよ。でも何故こうなのかは分からない。渡さんに聞いてみないとね」

と、ピアノを弾く彼に近づく者がいた。ジョシユアとレノンとが通ってきたそのドアから入り、その男の傍に来て、肩を叩く。

ふわりと輝く金の短髪と、同じ色の瞳を持った青年。

手を止め、彼を振りかえった初老は笑う。

「今日は君が一番だよ、聖」

「よかった、急いで来たんですよ。おはようございます法師先生」

「おはよう」

交わされた名に、レノンとジョシユアは顔を見合わせる。

「じゃ、やっぱピアノを弾いたのが法師篤実で」

「金髪が一世聖：魔道警察のトップってことは、僕等のことと階級が同じなら警視總監だね」

さて、じゃあお茶を淹れようかと椅子から立ち上がる篤実とそれ
に続く聖。

と、そこへ飛び込んできたのが三人いた。

「ちっ！！聖兄に負けたか！」

いかにも悔しそうに言ったのは茶の着物、茶の長髪を一本のみつまみにした聖より若そうな青年。

「急いだのになあ、残念だ」

残念と言いながら何処か楽しそうに肩をすくめたのは白い髪に虹色を重ねた、白い着物の青年。

これはもうレノンは一度見ている姿で、彼は白虎切言だとジョシユアへと教えた。

「：おはようございます、法師先生」

前の二人の言葉を受けるようにして言った声には、渡と同じイントネーションがあった。

ダークレッドの混じる黒の長髪を下の方で二つにくくっており、同じ色の憂いを帯びた瞳を持つ青年。体の線が前の二人よりも細い。その三人を見て、篤実^{あつみ}は笑って。

「ああ、おはよう。少し残念だったね、煉喜^{れんき}、切言^{きりあけ}、桐明^{きりあけ}。おうちの仕事は大丈夫かい？」

そう聞かれ、一番細い彼が答える。

「大丈夫です。出てもいいか聞いてきましたから」

そう、と篤実^{あつみ}は笑って、彼らを伴い会議室然としたその部屋へ。座っているように指示すると、自分は出ていった。

茶を淹れに行ったのかもしれない。

彼らの歓談を聞くうちに、二人はみつあみが煉喜^{れんき}、細いのが桐明、白髪が無論切言と理解した。

やや間があつて次に現れたのは黒の短髪に紫暗の瞳を持つ筋肉隆々の男と、緑の短髪と瞳の女性。

彼女は女性にしては背が高く、髪の切り方もとりあえず短ければいいといったボーイッシュなもので。

「おう、どうやら俺達は遅れちまったか」

「先生はお茶を淹れてくださってるの？ヒジリ」

言いながら、上座を空けて聖の隣へと二人揃って座る。

女性に聞かれた聖は柔和な笑みで答える。

「そうだよ。随分久しぶりだけど…初樹^{はつき}は今、正規魔術教員目指して修行中だっけ？」

ええ、と女性が頷く。

「色んな学校で色んな先生に学んでるの。今は北国。次で研修終わりにして、一度試験受けるつもりよ」

「初樹が先生ってなんか変な感じだなあ…で、薫^{かある}はフリーでうろろるか。いいよなあ気楽そうで」

そう言う煉喜に、黒い短髪の男、薫は肩を竦め。

「そうでもねえんだなこれが。結構苦労も多くてよう」

苦笑と共に告げた言葉の頃、突然階下から怒号が聞こえた。

「遊風ー！！死ねこんのド阿呆がー！！」

「え」

「遊風って…」

あの遊風さんだよな、と聞いてくるジョシユアにレノンとは多分、と頷く。

前に青宝^{せいほうぜつ}絶音という名の曲刀を見て欲しいと連れてきた老人の名である。

彼は水色でメタリックパープルの混じる長髪をポニーテールに結び上げ、目は紫陽花色。衣服は赤のローブという姿だったが…。

しかしその怒号のことを考えている内に、二人の背後で戸が開く。ピアノの部屋へ通じる部屋から、目を擦り擦り一人少年が出てきた。

この校の制服なのか、赤いマントのような姿をした衣服。

濁る赤の短髪と、同じ色のつり目。

「渡さんだ」

レノンが言った。漸く彼の記憶であるはずのこの世界に彼が現れたのだ。

煉喜が声を立て、みつあみを揺らして笑う。

「一体どこいたんだ。お前眠そうじゃなか」

「…朝から奥で寝てたんや」

くく、と薫も笑う。

「午前中授業あったんだろう？またサボりかお前。魔術剣の授業しか出てねえって淫に聞いたぞ？」

「勉強は嫌いや。武器を握ってるだけがええ」

きっぱりと告げたその口調。

あらあら、と初樹が苦笑して。

「なーんにも言わないなんて、先生も何だかんだでちょっとばかり、ワタルに甘いわよね」

渡はその言葉に何も反応せず随分と年上の仲間達を見て、疑問の表情を作った。

「……淫はどうした？さっき魔力感じたけど」

「まあ待て。すぐに来るわ」

ふ、と桐明が無表情だった表情を崩して花が開くような美しい笑みを作る。

三人組の中央に座っている彼に、両側から残り二人が同意。

渡が、訳が分からないといったように首を傾げた時、ばん！と戸が、廊下から通じている戸が開いた。

大きな音に、レノンとジョシユアも視線をそちらへと放る。

現れたのは、

「やっぱり遊風さんだ…」

二人が会った時よりもずっと若い、二十代のころの彼だった。

悪戯っぽく光る瞳が印象的な青年。

彼、静桐遊風が真紅の魔道ローブを翻して会議室へ飛び込むとすぐに追ってきた姿があった。

やはりこの学校の生徒なのか、渡と同じ衣装を着た少年。

青が濁った色のややつり目、それと同じ色の濁る青の短髪。但し、今は白い粉をかぶっている。

「ぶっ！おま、それどうしたよ？」

それに噴き出した薫。心外だ、とばかりに少年は言う。

「遊風のド阿呆が、俺の部屋の入り口に黒板消し挟んどったんや！それ避けたら…」

「ふふふ、一発目は避けられると思って足元に二発目の起爆剤、糸張つといたんだよ！うまーくプチンと切ってくれてな！おかげで湊の頭にクリティカル ヒットだ。凄えだろう！」

「黙れ死ね！！」

むきになって怒る少年に、ちょっと悪い大人の仲間達は大笑い。

それがまた恥ずかしいやらなんやらで、神経質そうな表情だ、生真面目融通が利かないタイプなのだろう少年は彼らにも怒る。

「っゝ渡！！お前まで笑うな！」

見れば、渡もまた口元に手をやり、堪え切れないというように笑っていた。

「いや…湊がそんな間抜けなことになってんのが、珍しゅうてな」

「だ・ま・れ！人事やと思うて…！」

「こらこら、そこまでにしなさい」

その時、廊下側から笑みを湛えた篤実が帰ってきて、青い髪の少年、湊は渡の胸倉を掴んでいた手を離す。

「先生！遊風が…」

「うん、じゃあ話はお茶を飲みながら聞くよ。ほら、美味しそうだろう？」

彼が湊に示したお盆にはレモンティーが人数分と、一本のロールケーキ。

「素敵！先生が作ったの？」

そう聞く初樹に、篤実は頷いて。

「今日の為に、昨日の夜作ったんだ。湊と渡に手を貸してもらってね」

柔和な笑みを湛える篤実は、湊に盆を示していた左手をそのまま彼の頭の前へ持っていく。

するとぱちん、と小さな音がして水泡が弾けた。

その水泡は霧状に弾けて湊の髪を包み込み、それが失せると、綺

麗にチョークの白い粉は無くなっている。

その光景に、レノンとジョシユアとは揃って釘付けになった。初めて見る《完成された》魔術だ。

「ほら、綺麗になった。じゃあ《皇帝の子ら》^{エンブリオ}の久しぶりのお茶会を始めようか、ねえ、湊？」

そう言われて、渋々といった様子で湊が頷く。

「……はい、先生」

かくして、篤実の手でレモンティーが配られ、篤実に指名されて《長兄》の聖がロールケーキを切り分ける。どちらも全員に行き渡ると、じゃあと篤実が言った。

「湊、遊風のした事だけれど、どうしてだと思っ？」

「どうしてもこうしても……！」

上座の篤実に問いかけられ、同じく上座に立つレノン、ジョシユアと向き合う形だった湊は机の向こう側、上座から聖、煉喜、桐明、切言と並び一番下座に座っている遊風を睨んだ。

「遊風は俺をおちよくって楽しいだけです！」

「そうとは限らんど副会長殿？」

にやにや、そんな擬音付きで笑いながら声を上げたのは煉喜だ。

「お前、端から見てどれだけ力入ってるか分かってるか？俺達が生徒会長だった時以上だぞ」

「当主見習いの今も力入ってないやろ」

冷静に隣、桐明につっこまれ、まあな！と煉喜は認める。

「レンのいう事は後半無視な。あと力入れてなかったのこいつだけだ。レンは高等部時代色惚け全開MAXでさすがの俺達も手に負えなかった」

「ちょ、セツ！酷さにも限度がある！あと高等部のことは春陽^{はるひ}が可愛すぎるのが罪作りだ」

は？と思考が停止した湊に続けるのは切言で、彼の言動を酷いというのは煉喜。

煉喜は、春陽はあの時もうほんと可愛くてなあ、あ、今は美人だ。

などと素でのろけた拳句に桐明に後ろ頭をぶん殴られて黙らされた。
「相変わらずあんた達三人、仲良しねえ…いいことだけど。ま、つまりそういうこと」

薫を挟んで、初樹が湊の顔を見て言った。

「まあねえ…超の付く問題児、渡と同室だから苦労も絶えないんだろうけど…あ、昨日も乱闘騒ぎだったそうじゃない？」

「悪かったな問題児で」

むっつり、腕組みの姿勢で渡が返す。そのまま彼の目は湊を捉えて。

「邪魔やったらいつでも出てくぞ」

「出てけなんて誰も言うてへんわ阿呆。第一、好き好んでお前の世話する奴なんて俺の他におらんやろ」

「あーあーこらこら止めろって」

そう薫が言いながら湊の頭をホールド、自分の方へ引つ張って渡から引き離す。

「なんで湊は、渡とはすぐ言い争いになんのかね」

「喧嘩するほど仲がいい、と言うやつさ」

そう言って笑む聖はロールケーキを口に入れて幸せそう。

ははは、と皆を一望する篤実が声を立てて笑って。

「分かったろう、湊。ここにいる皆して、新しく生徒会の副会長になり心労が増えて、最近顔色も悪い気がする君を心配していたんだ。誰よりも遊風と…渡がね」

その言葉に湊は驚いて隣を見るが、渡は視線をふいと窓の外へ。ぽつりと言った。

「…同室の人間に辛気臭い顔されたらこっちの気が滅入るわ」

その様子に、本当によく似た二人なんだよなあ、と篤実は苦笑。

一口レモンティーを含んで言った。

「渡はその心配な気持ちを、湊に率直に言う方法がわからなかった。そういうのに慣れてないからね。それで私に教えてくれた。無論私も気付いてはいたけれど…」

「私達もそれを聞いて心配してたんだ。体を壊しはしなかった。淫は少し真面目過ぎるからね」

言葉を接いだのは聖で、彼も優雅な動作でレモンティーを口にしながら。

ね？と問いかけるのは目の前、初樹だ。

「ええ、そう。なんでもカイリ、高等部一年も首席修了だったそうじゃない？ほぼ満点で。どーせまた根詰めてくそ真面目に勉強したんでしょ？」

「自称女の子が『くそ』とか言うんじゃないよ」

おいおい、といった口調で注意する薫に、悪かったわね、と言い返して続ける。

「あんまりご飯食べないって話もワタルに聞いて、お姉ちゃんはお力と電話でどうするか話し合ったりしたのよ？」

「おうよ。遊風がやってなきゃ俺が何かしてたかもなあ。こう、なんかぱーっと笑えるのを」

先越されて残念だ、と言って、だが嬉しそうに笑う薫はもうロールケーキを食べ終え銀のフォークを置く。

「ふむ。私個人としては得意の幻術でなんか笑わしたと思うてたんやけど」

そう言う桐明に、そうそうと切言が。

「一週間休学させて俺達の東の別荘で強制休暇って案がそのあと有力になったんだよなあ」

「素敵なタイトル付だったよな！」

煉喜の言葉を聞いて遊風が頬杖の姿勢、無邪気に問う。

「で？そのタイトルって？」

桐明が真顔で答える。

「『東国別荘シリーズパート4・春から夏へ…花見温泉湯煙殺人事件』」

「聞かなかったらよかった！」

ひい！と多少ビビリの聖が。

「それ完全トラウマ物だよー！癒す気皆無だよ！なんでシリーズ化してるの！？」

うむ！と煉喜が何故か誇らしげに。

「一週間の休学のはずが、永遠の休暇になる！永遠に俺達の別荘で癒し続けてやるぞ！エンドレス癒しだ！」

この面子中唯一の女性、初樹は苦笑して。

「あーうん。あんたたち三人、脳の検査受けてきなさい。常人と九割構造が違ってると思うわ」

その時だった。

ぷつ、と涙がふきだして、それはそのまま声を上げての笑いになる。

止まらず笑えて泣けてきたようだ。それがひとしきり続いた後漸く喋れるようになった涙が言った。

「皆、最高や。なんか、全部アホらしゅうなるぐらい」

ありがとう、と彼の口から告げられた遊風は、それはそれは嬉しそうに一つ笑顔で頷いた。

それをとても楽しそうに見ていた篤実が、涙にふと一つ聞いた。

「渡には、いいのかい？」

そうすれば涙は、にや、と笑って隣の少年を見て答えを返す。

「ええんです。下手に礼言ったり褒めたりしたら…俺とコイツの距離は逆に開く」

そう言った涙の顔は実に晴々としていて、目を逸らしたままの渡の顔も心なしかいつもの仏頂面から柔らいで見えた。

そうか、と篤実は笑って。

「じゃあ今日は魔術談議は無しだ。後の時間は…」

少し溜めを置いた篤実に、皆の視線が集中。

なんだろう、と予想したのは二人同じだったようで、レノンとジヨシユアはそれぞれの考えを述べる。

「ゆっくりこのまま雑談じゃないかな？というか、魔術の談議とかしてたんだね、普段。結構堅いなあ」

そうレノンが言うと、いやいやとジョシユアは腕を組んで。

「俺の個人的希望としては模擬戦がいいな！」

「超個人的希望来たね」

しかし篤実の口から来た答えは、どちらとも違った。

予想もなかった答えで、でも彼らにとつては当然の答えだった。
「歌おうか。湊の肩の力をもっと抜く作業だ。皆、協力してくれる
ね？」

皆が席を立つて向かうのは奥、ピアノの部屋。

レノンとジョシユアもついていく。

奏者の席につくのは篤実で、彼の周りを皆が囲むがそれは大体年齢で固まっていた。

聖、初樹、薫の年長組、煉喜、桐明、切言の三人組、それに遊風、湊、渡の年下組だ。

一番歌うことを楽しそうにしているのは遊風だった。

「な、先生最初何からいくんだ？」

「ん？うーん、そうだね…こうして皆と一緒にには久しぶりだから、まずは皆で歌える歌がいいね。せっかくここで歌う一曲目だから、私の作った曲にしようか」

篤実の細い指…騎士然とした服装からして剣士なのだろうがそうとは思えない綺麗な指が鍵盤に載り、なだらかに動く。

初めはでたらめに。

そして一つの旋律を紡ぎ始めた。

優しく流れる、起伏には乏しいが几帳面に編まれた織物のような
曲調。

そこから突然アップテンポに入って、跳ねるような元気を得て。
レノンとジョシユアとが見る皆は、それが何の曲だかすぐに分かったようだった。

体でリズムがとられている。

音が消える一瞬の後、入った。まずは全員の音量が来る。

男声が多く、女声もハスキーボイスの初樹のものだから、自然歌声は低く。

だがそれ故に重厚な響きを持って部屋を鳴らした。

『もしも私が神様ならば』

次に来るのはソロ、テノールの聖のパートだ。

真摯な態度が基本姿勢の《皇帝の子ら》の長兄は無論高貴この上なく麗しい声で紡ぐ。

『世界は優しく 暖かい思いやり溢れていて』

ソロのパートは続く。初樹だ。

女声、アルトパートで歌う彼女は力を込めて、だが女性特有の華やかさを付加して歌う。

『戦争もなければ 餓えもせず』

続くは更にアップテンポ、明るいパート。

歌うは地を震わすバスのパート、薫だ。

彼は楽しそうに紫暗の瞳を煌かせ。

『誰も彼もが夢をもつて』

次はソロパートではない。三人組はやはり三人組。

桐明がバリトン、煉喜がテノール、低音の切言がバスパートを担当する。

中等部時代に出会ってからというもの、互いを魂の片割れといって憚らない三人だ、息の合い方は言うまでも無い。

完璧なハーモニーが奏でられた。

『誰も彼もが楽しい そんな世界にするだろな』

次には真剣、力の籠る叫びのようなパート担当するのはバリトン

の遊風。

彼は右の拳を握り、それが彼の本心の言葉であるように歌い上げる。

なんでも出来てしまう天才と呼ばれる彼は、無論歌唱力も並以上であり。

『子供だつて願える単純な願い』

叫びは続く。受け継がれた先は同じくテノール湮で。

彼は遊風と対称的に胸に手を。理性的に。

『そんな全部を叶えたいのに』

ソロパートを締めくくるのは静かな、静かな呟きにも似たバス、渡のパートだった。

渡は静かに目を閉じて。

『どうしてだろう？ どうして私は 強くなれないんだろう？』

後は全員一緒に、強く歌い上げる。

ただ終わりに向かつて、全員が気持ちよく互いに響き合う音の場だ。

その音に囲まれ弾く篤実が、一番気持ちよさそうな顔をしているようにも見える。

彼の声もまた歌を紡いだ。

『どこまでも どうしても 弱い身体が 軋む心が 求める

強くなりたいよ 明日笑えるよう

でもやっぱり 神様はいいか

君と出会えて思えた 君と同じ 哀れな人の子で

私はそれでいいや 君とでなきゃあ、

』

曲が終わり伴奏が途切れて。最高！と遊風が嬉しそうに叫んだの

を終わりにして、レノンとジョシユアは世界の転換に巻き込まれた。

「…お？お？」

暫く先ほどの歌に二人は放心状態だったが、我に返ったジョシユアから疑問の声が上がる。

周囲の世界は変わっていた。

あのピアノの部屋ではない。

どうやら周囲の世界は赤い城の中ではないように思えた。

「それで」

後ろで響いた声に、二人で振りかえる。

湊と渡との姿があった。

やや成長したようで、二人とも軍服に似た灰の服：レノンが輪風の世界で見たのと同じ服を纏っている。

「お前も来るんか、魔道警察に。それも俺と同じ本部勤務かい」

そう訊いたのは湊、答えるのは渡だった。

「元々俺が魔道警察へ行くんは決まってたことや。戦いしか能のないような奴やしな。お前が行ったんがおかしい。配属先はどこでもええって言うたら、聖に勝手に決められたんや。なんでも、自分の目に付く場所に置いときたらしくてな」

そうか、とだけ湊は返した。

また転換が起こる。随分早い、とレノンは思った。

世界が変わった。

どこかの建物の中、夕焼けが照らしている。

今度は二人の前に、湊と渡とがいた。歳をとって、壮年と呼ばれる頃合だ。

衣服は互いに濃灰のスーツで、湊は椅子に座り渡は立っていて二人の間に重厚な机と大量の書類がある。

他に変わった所と言えば、湊の短髪がオールバックになり、手には白い手袋、頬に傷があった。

渡の首にマフラーが巻かれている。

「渡」

「あ？なんや、わざわざ呼び出して」

湊は一時沈黙して、意を決したように。

「西国支部を任されることになった」

「は？」

訳がわからない、というように聞き返した渡に、湊は続ける。

「来月聖さんの警視総監就任が決まった。それで、右腕として使ってきた俺をどつかの支部長に据えることにしたんや。丁度西国支部の落影^{らくえい}支部長が今月一杯で隠居したいって言ってるな。それで、西国支部が空くんなら俺を西国支部長にすることらしい」

「……そうか」

渡は一度頷く。

「で？俺は本部勤務のままか？」

やや寂しそうに見えるその表情に、湊は一度笑みを浮かべる。

「聖さんが言うてくれたんや。本部だけでなく、どこの支部からでも好きな奴連れて行けって。俺の信用できる人間、俺が力を認めた人間を西国支部へって」

射抜くような印象的な視線で、渡を見つめる。

「誰でも選んで連れていける、その権限を初めて行使する。来るか？俺と一緒に、正義と騎士の国へ。先生の教えてくれた正義を果たしに行く鬼に…鶴はついて来るか？荒れ模様、辛い空を…空を飛べん鬼の代わりに飛ぶ覚悟はあるか？」

「訊く意味があると思うて訊いとるんか」

間髪入れずに返せば、立ちあがった湊が渡の横を抜け、この部屋を後にする。

渡に背を向けたまま、言葉が飛んだ。

「鶴恩渡。お前が来月から西国支部の刑事長…実働部のトップ、支

部長の右腕や」

刹那、世界の転換が襲ってきた。おかげで、渡がどんな表情をしてどう答えたのかは二人には分からなかった。

「見たか」

は、と気が付けばそこは元の部屋。

レノンの家のリビングだったり応接間だったり色々な部屋で、コーヒを飲みながら渡がこちらを見ている。

見れば、自分のマグカップからはまだ湯気が立ち上っていて。

「はい…あの、歌…とても素敵でした」

素敵な仲間ですねと言えば渡はばつが悪そうに、記憶の中で見たのと同じように視線を逃がした。

「でも、なんで歌を？」

そのジョシユアの問いにはすぐに答えが返る。

「俺達の世界、魔道士の世界では舞いと、それに歌を付加する文化があつてな。卒業・入学式とか昇進の祝いとか、とにかくめでたい席で舞われるんや。その舞いと歌とが上手い奴が重要な地位を得た時代があつたらしい。今はもうそんな露骨でもないけどな…まあ下手より上手いほうがええやろ。それで先生が俺達にみっちり教えてたんと…先生の趣味が作曲やったんで、先生の趣味つてのも関係するか。俺の取り得が戦闘技術と音楽しかなかったんもある」

へえーとしきりに感嘆するジョシユアに渡は、止め止めと言うように左右に手を振り。

「トリイに関係ありそうなこととかの解説、いるか？記憶見ただけやったらちよつと足りんやろ」

「お願いします、あ…えつと」

なにやら言いたいことがありそうなレノンに、渡は口を挟まないことで続きを促す。

「僕達が見たのは渡さんの記憶なんですよ？何故初めての記憶で、渡さんは眠っていたのにその間の皆さんの記憶が見えたんです？」

ああ、その事かと一つ頷いた渡は軽く左腕を広げる。

一瞬のイメージでそれは来た。

魔力の可視化である。

「うわっ!？」

ジョシユアが思わず眼前の光景に声を。

透き通った赤い何物かが、渡の身体を中心として発散、ジョシユアとレノンの身体を貫き部屋一つを埋め、それは壁を突き抜け外へと出ていて。

まるで焰のように揺らいでいる。

「俺の発散してる魔力をお前らにも見えるようにした。俺らの扱う魔力いうんは、要は生命力や。生きてるもんは動物でも植物でも持つてて、人間はそれをきまりに従って定められた呪文で増幅させたり調整したりして術の形にする。慣れたら集中だけでも使えるけどな。病や術の使い過ぎで魔力を使いすぎたら、命にも関わる」

もう一度の集中で、赤い光は消え失せた。

「リメンバーストック《回想》は、正確には使用者の魔力が記憶してる物を他の奴に見せる術らしい。俺は頭が悪いんで詳しくはよう分からんけどな。さつき見せたように、魔力はなんもしてなくても勝手に結構な範囲に広がる。他の奴に見せんようにする事は出来ても、全く出さん事は無理や。まあ、そういうわけやな。あの時俺は奥の部屋で寝てたけど、魔力の届く範囲内に先生や他の奴らがおったからそれが記憶として残った」

一度喋り疲れたか言葉を切って。

「犯罪操作にもよう使われる術や。不便なんは自分の記憶に自分で入れんこと。俺も初めの記憶の中、俺が起きてきてないとこの記憶は勿論無い。涅に見てこさせて、それを聞いたから大体は知つとるけどな」

こんなとこで分かったか、と聞くとレノンは頷いた。

ジョシユアはまだ唸っていたが、レノンには相棒が難しい事を理解できないのはいつもの事なのでさっさと進める。

渡は次に記憶の中、トリイに関わるかもしれない話へ。

「それで…三人組の中の白髪の男が白虎切言、輪風の半身を作った男。水色の長髪、年寄りが法師篤実先生、金髪のふわふわしたのが一世聖。静桐遊風には会ったんやったな」

はい、とレノンが返す。

「そこからあの三回ともに出てきた、鬼島湊にレノンの話がいつてな。それを湊が俺に教えて、今俺はここにおる」

遠くを見る眼で、続けた。

「調査書に書いたように、トリイの基礎には篤実先生の魔力があつて中に魔力を注入してある。その魔力は先生が亡くなってから暫くで尽きてな。その代わりに、俺達…記憶の中で見せた、先生を慕った集団、《皇帝の子ら》の長兄、聖がトリイに魔力を入れた。エンブリオつて名は確か記憶中に出てきたな」

どう続けたものかと思案、続ける。

「先生は正義を愛した人やった。己が絶対に貫きたい思いを正義と定めた人やった。俺達は自分の正義をもつて、その時から生き続けている。その正義が、俺には大切な人間の道を護る事や。俺は…最初の記憶で見たような調子や。湊と妙に気が合うような合わんような感じで、何十年も湊の道を護る為に戦ってきた。その俺を助け続けてくれたんが、トライアンフ…」ゴトネス・オブ・トライアンフ《凱旋の女神》」

はい、よく分かりましたと頷いてレノンは破顔した。

「今こそ、僕はトリイと話しにいくと思います」

頼む、と渡が言うのとレノンは右手を机の上へ。

Godness of Triumphの上へと乗せた。

刹那、視界が黒に染まりレノンは武器の世界へと飛んで行く。

意識だけの存在となって。

え、という戸惑いの声が落ちる。

「これ、は」

赤の城のどこか一部だろう。似たような色彩と床だ。

眼前には、撒き散らされた白い画用紙。

そしてキャンバスに向かう少女がいた。

真っ白な布で構成されたふっくらとした衣装はそれこそ女神のそれを思わせ、同じく白い紐をベルト代わりにして腰の辺りで縛っている。

「……」

彼女は無言で振り向いて。

「あなたは勘が、いいんですね」

金の長い髪に碧眼、天使のように愛らしい少女の姿に変わらず可愛らしい声だった。

「なんでもお見通しみたい。篤実先生や聖さんや、他の皆のことを知らなかったら、このお城の中で勉強してもらおうと思ったんだけどな。渡さんの周りの人のことを知らない人と話すの、嫌だものでもさつき渡さんの過去で勉強したものね。だからここに直接連れてきてあげたの」

レノンは暫く驚いていたが、彼女にキャンバスを示されて声を思わず漏らす。

「あ…それは…」

彼女が描いていたのは、渡と仲間の姿だった。

中央に立つのが法師篤実、両脇に聖と初樹がどちらも笑顔で。

初樹は篤実の右腕に己の腕を絡めていて、篤実はそんな彼女に苦笑を見せている。

初樹の隣で、座っている遊風の頭をくしゃくしゃと撫でる薫。

止めろと言っているのだろう、両腕を上げ彼を止めようとしてやはり笑っている遊風。

聖の隣には三人組がいて、煉喜と切言に挟まれた桐明が年齢につ

りあわないほど幼く純粋な、こぼれそうな笑顔を向けている。

幼い子を護るように両脇の二人も笑みを見せる。

薫の更に隣に、記憶中の姿で渡と湊がいた。

湊は両手に何やら書物を持って微笑しており、渡は肩に刀を担いで、珍しいことに確かにその表情は笑みだった。

皆に頭上から、雨の如く降り注ぐのは桜の花びら。

桜の花言葉は、『善良な教育』という。そう、絵を描いた彼女が口にした。

「同時に、桜は桐明さんの花でもあるの。私が好きだから描いたって理由もあるけど」

とても明るい、楽しい気分になる絵だった。

少女のような彼女の外見に似合わず、精巧な絵でもあった。

素敵な絵です、とレノンが褒めれば嬉しそうに彼女は笑った。

「私はいつもここで、こうして色んな渡さんに関係する絵を描いてる。この絵は、もう少し修正したら完成だよ」

完成した所も見てみたいと思いつながら、レノンは言う。

ここに來た真の目的の為だ。

「僕がここに來た目的のことなのですが、お話していいですか？」

その言葉に彼女は頷いて、いいよと言って筆を置く。

キャンバスからレノンの方へと身体を向けた。

だからレノンは聞く。

「あなたは、昨日の晩渡さんに訊いたところ…最近急に聖さんの魔力が入らなくなったそうですね。その不調を、僕は治しに來たのです」

その言葉に、あ、と彼女は顔を赤らめる。

「私…」

「ええと、何か心当たりが…？」

こくん、と少女は頷いた。

「渡さんが、大好きで、それで…」

かあと顔を真っ赤にして告げられた言葉、凱旋の女神が告げるそ

の全てをレノンは聞き届け、覚えて。

「成る程、分かりました。確かにお伝えします。西国の騎士達を護る、凱旋の女神よ」

全て聞き終えてそう言えば、トリイは安心したようにぶんぶん縦に首を振った。

幼い笑みが浮かぶ。

「ありがと。私、あなたに会えてよかった」

僕も、あなたに会えてよかったです。

そう、レノンは笑った。

凱旋の女神は思い出す。千刃鶴せんはづると呼ばれ、無双の強さを誇る主と歩んできた日々を。

多くの怪我をした主を癒しきれないこともあった。

護りきれないこともあった、それでも。

それでも主は感謝してくれた。

俺の強さはお前のおかげや、と。

主は友と共に西国で戦うようになって、多くの部下に囲まれるようになって。

そうして、そのうちに自分は西国支部の女神と呼ばれるようになった。

飛び続ける鶴を天より守護する女神。

そう、呼ばれるようになった。

とてもそれは幸せな事だった。

武器としてではなく、彼のパートナーとして認められたようでとてもとても、幸せ。

凱旋の女神の記憶は主の姿と共に、大きな幸せに満ちたものだ。

回帰の感覚。レノンは再び帰って来て、閉じられた瞳を開く。

「ただいま帰りました。ありがとう、トリイ。確かに伝えるよ」

そう言つて、一度鍰を撫でた。

「嫌に早かつたな。俺と渡さんが話す時間も無いぐらいだぞ？」

驚いたようなジョシユアに、笑つてレノンは頷く。

「渡さんに記憶を見せて頂いたのがよかったみたいです。捜す必要無く、彼女から僕を呼んでくれましたから」

さて、とレノンは座り方を直して。

「彼女の不調は、多分簡単なことで治りそうです。えっと、僕が不調に心当たりはと訊いた時の彼女の答えをそのまま口にしようと思います。僕のような男が口にするのとちょっと気持ちが悪いかもかもしれませんけど。…トリイは金の長髪に青い瞳、白い…天使のような衣を着た、可愛らしい少女ですからその辺りを考慮しながら聞いてください」

ああ、と渡が返したのでレノンは始めた。

「『渡さんが大好きで、それで…渡さんの役に立てるだけで嬉しいのに、でも…他の武器達が手入れとかよくしてもらってるのに、私はあんまりそれが無くて。護り刀だから痛むことが少ないんだから当たり前なんだけど、でも羨ましくて。なんだかもやました気持ちになっちゃった。だから、それが多分影響してるんだよ。渡さんを一人占めしたいような気持ちになる。悪い子だね、私。でも、大好きなの』」

一度言葉を切つて。

「つて、こういう感じなんですけど…どうしました？怖い顔で」

眉をひそめ、レノンを睨むように見る渡。

「……なんやその痒うなりそうなのは」

「だってトリイがそう言つたんですもん」

あはは、とジョシユアが笑う。

酷く彼は面白そうだ。

「お医者様でも治せない恋の病ってか」

レノンが肩を竦め。

「でも、解決はある意味簡単でしょう？ 渡さんがトリイのことを大切にしているって、ちゃんと示せば解決すると思います」

さあ、どうするか考えてくださいね？ とレノンに言われ、渡は複雑な表情で溜息。

「……女は苦手や。記憶で見たやろ、初樹っていう緑の女……って女は一人しか出てないか」

ええ、と頷けば心底嫌そうな顔で。

「アレがとんでもない女だな。他にもとんでもないのしか周囲におらんかったから、完全にトラウマや」

さてどうしたものか、と頭を抱え、そして暫しあって顔を上げた。苦笑の表情。

「帰ってから、俺より頭のええ上司に聞いてみる」

それで、と聞く。

「輪風はさっきお前がトリイのところに رفتる間に受け取った」

指差された机には、確かに輪風朱姫の包みがあった。

そのまま渡は右手でそれと、トリイも一緒に拾い上げて。

「それで、淫が早う帰って来いって言うてたから帰ろうと思うけど

……報酬はなんや？ 菓子か？」

遊風の時の話を聞いていたのだらう、そう聞いてきた渡にレノンは返す。

「あ、では、お願いできますか」

二本の指を立てて。

「いつでも構いませんから、出来次第で……二つ、刀か剣の魔術武器を作ってもらえませんか。僕とジョシユアに一つずつ。勿論、渡さんの魔力を使ったものを。魔力のない僕達でも有するだけなら大丈夫でしょう？」

予想していなかった答えか、渡は驚いたように目を見開く。

レノンは続けた。

「魔道武器っていうのが、凄くいいものだと思っただけです。だって鍛冶師と基礎魔力を提供する魔道士、両親が揃ってるんですから」

渡はレノンの答えを聞いて、それから僅かに笑う。

「ああ、分かった。出来次第送る」
ではと別れを告げると一瞬で、その姿は風に包まれ消え失せて。
そうして、彼とレノン達とは別れた。

それから、一ヶ月ほど後の話になる。

砂糖・ミルクがどばどばのコーヒーを飲みながら、レノンとジョシユアが語らっていた。

机の上には二つの武器が乗せられている。

一つはとても細身の刃を持った、短めの剣。

金の茨と青い宝珠があしらわれた優美な物で。

もう一つは刃の幅だけで二十センチもあるかと思われるほどの大剣で、角張った無骨なフォルムと赤い宝珠が特徴的だった。

レノンが同封の手紙を手話に話す。

「銘はこつちにあるけど、後で見てもよ。名は、僕用の細い方が『ルミネ』、ジョシユアの太い方が『ガルゲルダ』。両方とも、渡さんが作った武器だから女性名をつけたらしい」

「ガルゲルダか……じゃあ呼び名はガルだな。よろしく」

やーいい剣だ、と武器オタク入った表情でガルゲルダを眺める友。それをちよつと嫌だなあといいながらレノンは先を読み進めて、手紙を読んでいない友に聞かせる為に喋る。

「輪風は部屋に置くことにしたって。それから」
ふっ、と表情が緩んだ。

「トリイには、あの車輪のようになった鰐にリボンをつけてあげたんだってさ。部下の皆さんや湮さんと話して。結構彼女にリボンをつけてあげるの好きみたい。若い部下の人を中心に、湮さんも加わ

って：色んな人がつけ替えてくれて、殆ど日替わりの状態なんだって」

「よかったじゃんか！それって、トリイの世界ではちゃんとトリイ自身がりボンで髪結ってたりすんだろ？」

ちゃんと話を聞いていたらしい友が、そう返すのにレノンも頷く。そう、武器の体に施した装飾は精神にも影響を与える。

柄に赤い布を付けてもらったある槍は精神の世界では首に赤いマフラーを巻いていた。

「それでね、その日替わりの方は一本で：もう一本はずっと同じりボンをつけてるそうなんだ。それが：渡さんの髪と同じ、濁った赤色のりボン。渡さんが自分で買ってきて来て、結んであげた物だって」

レノンには、くるくる替わるりボンと、替わらない濁った赤色のりボンとで髪を二つにくくり幸せそうに微笑む、小さな女神が見える気がした。

「これからもずっと：渡さんと一緒に幸せに。トリイ。ちゃんと渡さんは、あなたを見ていてくれますから」

（ ありがとう、渡さん ）

（ずっとずっと、大切にするよ！）

『たそがれにわ黄昏庭』に存在する唯一の国、タソガレ。

そこに一人の青年がいます。

武器と話す青年が。

全ての世界において一人しか持たない異能の彼は
今日も全世界の人々の、問題を起こした武器と話します。

武器、ワラウワラウ

幸せに、苦しんで、楽しく、一人で、想って
思っ

今日も明日も、お客さんは絶えません。

だけれどこの物語は、ひとまずここでグットア
ンド トゥルー
エ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2161ba/>

武器シリーズ

2012年1月5日20時53分発行